2006年度
活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

はじめに

教養研究センター所長　横山千晶

2006年は教養研究センターにとって開所から5年目という節目の年でした。2005年度が開所から新たに5年目を迎えるための土台見直しの年であったのだとすれば、2006年度はその土台を具体的にどう補強していったらよいのかを視座に入れた、過去と未来をつなぐ年だったといえます。今までのさまざまな研究と教育の活動を基礎にして、次に何ができるのかを考え実行に移すと同時に、過去の各活動を評価し、将来に向けてどう改善していくのかを考える重要な地点に教養研究センターは到達したのです。

5年間の総決算を目に見える形で提示し、そこから教養研究センターの未来図を描いて見せるという年間活動の軌跡を如実に表しているキーワードは、「つながる」と「つなげる」です。これらのキーワードを代表する3つの活動を以下に簡単に紹介したいと思います。

まず、大学で学ぶものがどのようにして他者と、そして自分自身とつながっていくのかを見据えたことが挙げられます。2003年度に教養研究センターの実験授業として立ち上がった「スタディ・スキルズ」は2005年度から「アカデミック・スキルズ」と名前を変え、2006年度も週3コマ開講されました。この実績をもとに、2006年度は基本的なリサーチ能力と発信能力を身につけた学生が、その能力をさらに応用力として発揮できるように導く新しい授業の開発を、「アカデミック・スキルズ」担当者を中心に話し合いました。「アカデミック・スキルズ」という道具を使いこなして、どのようにさまざまな知と、そしてやがては社会そのものとつながっていくのかが次の課題です。開講後4年目を迎えた「アカデミック・スキルズ」の授業は、2007年には今までの成果をもとに次の発展形をカリキュラムの中で展開していく予定です。

同時に「自己とつながる」、「他者とつながる」ことを発信の主体である身体を通じて見直す試みを、基盤研究「身体知プロジェクト」の実験授業を通して行いました。2005年に発足した「身体知プロジェクト」では、身体に対する意識の希薄性を問題の端緒として、そこからどのように「身体知」を捉えていくのかを1年間の研究会を通じて議論しました。その論点を学生と教職員が一体となって体感する場として開講したのが実験授業「体をひらく、心をひらく」です。普段無意識に行っている呼吸すら、新たな自己表現となります。言語以外のさまざまな身体活動を通して自分自身と向き合い、他者とつながっていく、あるいは触れ合っていくという試みは、自己とすら表層的にしか向き合っていない現代の身体のあり方を再認識させると共に、自分の身体に対する新たな発見とその可能性を体感する気づきの場となりました。すべての知的経験は、自分という存在から始まるという考えをどのように教育の場の中に活かしていくのかは、これから時間をかけて取り組まなくてはならない課題となるでしょう。

次に挙げられるのは、義塾内外の組織と協力しながら行った特別講演会の開催です。今年も教養研究センターではいくつかの公開セミナーと公開講演会を開催しましたが、そのひとつが2006年10月30日に開催された「クリスト&ジャンヌ＝クロード講演会」です。教養研究センターでは2004年度より3回にわたって「現代藝術展」を開催してまいりました。日吉キャンパスの来往舎という場所を使って、アーティスト自身のワークショップを絡めながら、総合大学の教養課程に在籍する大学1、2年生に向けて「藝術」を発信し、受けとめてもらう場として、 これらの展覧会は実績を重ねてきました。その積み上げをもとに、今年は京都造形芸術大学と協力して、モダン・アーティストの巨匠であり、芸術のあり方を根本から問い直す活動を展開しつづけるクリスト&ジャンヌ＝クロードを招いて、講演会を開催したのです。今回はこの講演会を1日限りのイベントとして

終わらせることのないように、特別講演、解説付きのビデオ上映会、そしてアーティストから提供されたポスター展示会を通じて、10 月の講演会へと学生たちを導いていきました。講演後に開催された懇親会では、クリスト&ジャンヌ=クロードと、お二人を慶應義塾に紹介してくださった千住博氏を囲んで、何人もの学生たちが熱心に、世界と向き合って生きていくことそのものに対する質問を投げかけました。その姿は、これらの試みの成功を物語っていました。

教養研究センターとしてはこのような大規模な講演会の開催は初めてのことです。アーティストご本人たちからだけではなく、内外のさまざまな機関からのサポートと、それらの機関とのコラボレーションなしにはこの講演会は実現しませんでした。そして、その過程ひとつひとつがセンターにとっての大きな資産となりました。特に京都造形芸術大学関係者の皆さん、副学長であり日本画家の千住博氏には多大な援助を賜りました。互いに横浜と京都を行き来しつつ立ち上げていった今回のイベントは、まさに離れていても場と時間を共有して実現したものです。一方は芸術の専門大学、一方は総合大学の教養課程という異なった環境の中で、それぞれが目指す芸術教育、そして教養のあり方に関して、納得のいく意見交換ができたこともこの講演会の残した大きな成果です。このようにして構築されたさまざまなつながりが、今後のセンターの活動を支えていくことは間違いありません。

国際的に活躍する有識者、および研究者を招いてのこのような公開セミナーおよび講演会は、日吉キャンパスを中心とした学生に幅広い「知」の体系とそのダイナミズムに触れる機会を提供するために開催されています。多くの学生たちが参加し、直接講演者と対話する機会はこれからも積極的に作っていく予定です。なお、これらのセミナーおよび講演会の内容は、教養研究センターの「CLA-アーカイブズ」シリーズとして随時刊行されていきます。

最後にご紹介したい「つながり」は他機関とのコラボレーションです。今年も教養教育や初年度教育、そして導入教育をめぐってさまざまな研究機関との意見交換が展開されました。特に 2007 年の 1 月に玉川大学コア・FYE 教育センター主催シンポジウム「一年次教育の可能性―高等教育における役割」にて発表を行い、パネル・ディスカッションに参加し、教養研究センターの教育活動を紹介すると同時に、関係諸機関との活発な議論ができたことは、センターにとっての大きな収穫でした。2007 年度は、教養研究センターの活動を内外から評価していただく年にあたりますが、その活動を随時積極的に告知し、常に助言をいただける状態にセンターを置いておくオープン性は重要です。広報と発信はその意味でも力を入れていくべき活動でしょう。

以上ご紹介したように、教養研究センターの活動はその幅と規模を広げつつも、その焦点を見失わない努力が必要とされています。内部や外部の他組織と協力し合い、つながっていくことで、腹蔵のない批判と助言を受ける環境を作り上げていく年が 2006 年度であったといえます。これからはそこで得た批判と助言にどのように応えていくかが課題となります。批判も助言も受けることは非常に簡単です。しかしそれに対してどのように自分の立場と信念を説明し、どのように自分自身を変えていけるかこそが、センターの存在理由に関わってくるからです。そのためにもぜひとも皆さまの協力を賜ることができますよう心からお願い申し上げる次第です。

目　次

Ⅰ. はじめに　03

Ⅱ. 2006 年度活動報告

1. 教養研究センター運営委員会　06

2. コーディネート・オフィス

研究企画ボード　08

調査・研究セクション　12

交流・連携セクション　13

広報・発信セクション　14

日吉行事企画委員会（HAPP）　16

極東証券寄附講座運営委員会　18

日吉キャンパス公開講座運営委員会　20

3. 研究活動

公開セミナー「ミシェル・フーコー使用法」　21

公開講演会「クリスト & ジャンヌ＝クロード講演会企画」　22

基盤研究①カリキュラム研究　24

基盤研究②身体知プロジェクト　25

特定研究　27

一般研究　43

Ⅲ. 資料編

1. 日吉キャンパス公開講座 受講者アンケート結果　46

2. 教養研究センター規程　47

3. 教養研究センター運営委員会委員　49

4. 教養研究センターコーディネート・オフィス　50

5. 教養研究センター所員・研究員　51

6. 2006 年度の主な活動記録　53

Ⅳ. 終わりに　54

教養研究センター運営委員会

2006年度の運営委員会は、9月19日と3月14日に来往舎において開催された。このほか、回覧審議が4月と12月に行われた。

第1回運営委員会

研究員（非常勤）の2006年度に係る任用に関して回覧審議が行われ、承認された。

第2回運営委員会

西村常任理事の挨拶に続いて議事に入り、まず、人事について、センター所長として横山千晶君が2006年10月1日付で重任することが報告された。この後、各セクション・委員会から大略次のとおり2006年度前期の活動報告があった。

平成18年度日吉予算管理部門内調整費のうち3,000万円が、センターの「新しい教養授業の支援」に充てられ、事業の公募および選考の結果、合計15件、総額2450万円を採択した。「教養研究センター選書」の原稿をセンター所員から募った。来往舎現代藝術展第3回「SWITCH」展を6～7月の2週間開催した。会期中、シンポジウム「わかりやすい現代芸術」も併せて開かれた。公開セミナー「ミシェル・フーコー使用法」を同月に開催した。春学期には「授業公開」を行った。こうしたセンター等の活動は、電子媒体、印刷媒体の両面で広報している。日吉行事企画委員会（HAPP）企画として新入生歓迎行事が開催された。オムニバスの極東証券寄附講座「生命の教養学」を、「生命を見る・観る・診る」の主題のもとに、春学期に開講した。なお中村桂子氏（JT生命誌研究館館長）による特別公開講座が6月に開催された。これに関連して、8月にJT生命誌研究館の「生命誌出張展示」を開催した。日吉キャンパス公開講座は9月末から10回にわたって、一般人を対象とする公開講座を「自然と科学と人間」のテーマで開講する。基盤研究「教育カリキュラム研究」では、①カリキュラムのあり方、②授業の目的とレベルの設定、③組織的な成績評価方法の実例――について検証を進めている。最終的には、①日吉共通科目の新しいあり方、②成績評価、③シラバス、履修登録、セメスター制――についての現状分析と提言を行いたい。基盤研究「身体知プロジェクト」では、メンバーそれぞれが展開する身体知教育の実態とその目的、問題点を報告し、実践的なワークショップを展開している。秋学期には実験授業「体をひらく、心をひらく」を開催予定。学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」は、継続事業が開始2年目にあたる。これまでは従来の理論、他大学等の状況を調査してきたが、秋からは実践に向かい、ワークショップ、実験授業を随時公開する。

続いて審議事項に入り、まず副所長人事に関して、佐藤望、中島陽子、萩原眞一の各君が選出された。任期は、2006年10月1日から2008年9月30日まで（ただし、中島君は2008年3月31日の定年退職時まで）。また、交流・連携セクションのコーディネーターの交替、所員、兼任研究員の登録が承認された。さらに、極東証券寄附講座運営委員会委員長（武藤浩史君）および同委員、ならびに日吉行事企画委員会（HAPP）委員長（小菅隼人君）の委嘱が承認された。

議題

●報告事項

1．人事について

（1）所長、（2）研究員（非常勤）

2．『2005年度活動報告書』について

3．2006年度前期活動報告

4．その他

●審議事項

1．人事について

（1）副所長、（2）交流・連携セクション コーディネーター、（3）所員、（4）兼任研究員、（5）極東証券寄附講座運営委員会委員長、（6）極東証券寄附講座運営委員会委員、（7）日吉行事企画委員会（HAPP）委員長

●懇談事項

1．センター設置講座について

●配布資料

①『2005年度活動報告書』、②予算管理部門内調整費「新しい教養授業の支援」採択結果、③「教養研究センター選書」応募要項（2006年度）、④各種企画（来往舎現代芸術展3「SWITCH」展、公開セミナー「ミシェル・フーコー使用法」）、⑤『Newsletter』No.8、⑥日吉行事企画委員会（HAPP）2006年度入学歓迎行事、⑦2006年度極東証券寄附講座（講座「生命の教養学―生命を見る・観る・診る」、ギャラリー展「見る・観る・診るの生命誌」）、⑧2006年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座「自然と科学と人間」、⑨「クリスト＆ジャンヌ＝クロード講演会」、⑩身体知プロジェクト「体をひらく、心をひらく―新しい実験授業へよう

こそ」、⑪ワークショップ「フィールドワークを考える」、⑫教養研究センター人事（案）

第3回運営委員会

研究員（非常勤）の2007年度に係る任用に関して回覧審議が行われ、承認された。

第4回運営委員会

2006年度後期の活動について、各セクションから大略次のとおり報告があった。

「クリスト&ジャンヌ＝クロード講演会」および、千住博（日本画家、京都造形芸術大学副学長）と石井達郎（理工学部教授）によるプレ・レクチャーを10月に開催し、盛況であった。予算管理部門内調整費事業「新しい教養授業の支援」成果報告会を12月に開催した。同じく12月開催のHiyoshi Research Portfolioの企画として、調査・研究セクションの活動に関してポスターを展示した。併せて「開かれゆくキャンパス6　日吉キャンパスタウンミーティング」を開催した。3月に講演会「教養教育とは何か――スタンフォード大学の取り組み」を開催した。これについては、報告書を作成する予定である。「開かれゆくキャンパス7　一貫教育の冒険2」として「福澤諭吉の手紙 朗読会」を2月に開催した。昨年の「平家物語群読会」に引き続くものである。センター選書として常山菜穂子著『アンクル・トムとメロドラマ――19世紀アメリカにおける演劇・人種・社会』を刊行する。また、センターの英文ホームページを立ち上げる運びである。

以下、委員会等の報告を、07年度の活動予定も含めて行った。

日吉行事企画委員会（HAPP）では秋の公募企画行事が3件催された。07年度の入学歓迎行事は7件を予定している。センターの極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」は3クラスで56名の学生が履修し、教員は8名が担当した。2月にはプレゼンテーション・コンペティションが開かれ、他大学からの聴衆もあった。07年度は、従来の内容のクラスに加えて、新たに、“読むこと”および“講義を聴くこと”を中心として授業を展開する1クラスを設ける。設置授業「生命の教養学」は、07年度「誕生と死――その間にいる君たちへ」をテーマとする。基盤研究「教育カリキュラム研究」は、約2年間の研究が収束し、3月に研究報告書を発行する。これは、全キャンパス・学部・学年の学生側の視点から慶應のカリキュラムを評価する初めての試みとなる。基盤研究「身体知プロジェクト」では、通常の体育・音楽・美術とは異なった表現手段を用いて「自らを“ひらく”」実験授業を開講した。07年度も研究プロジェクトとして継続する。特定研究・学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」の07年度は、同事業の3年目で研究をまとめる年次であり、これに向けて06年度は研究のモデルを構築するために各種の実験授業、ワークショップ等を展開した。新しいキャンパスのあり方として、キャンパス外に施設を設けての試みも進行しており、ここで実験授業を開講することを構想中である。「hydi（hyper digital interface）」――インターネットを通じて文書・情報を交換したり、研究成果を公表するシステム――も、ほぼ完成した。一般研究については、07年度については7件を採択する。日吉行事企画委員会（HAPP）、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会、一般研究については、07年度の計画案が承認された。

続いて審議事項に入り、センターの組織および今後のプロジェクトについて、研究組織としての活動と目的を明確化するため、センターのプロジェクトを年度ごとに立案・検討し、センター運営委員会の承認の下、セクション制は取りやめ、「研究企画ボード」が直接に統括するよう、組織を改編したい旨、センター長から提案があり、承認された。また、07年4月をもって任期を更新または新任の所員・兼任研究員の推薦がなされ、承認された。さらに、2007年度予算（案）が承認された。

議題

●報告事項

1. 2006年度後期活動報告について

●審議事項

1. センターの組織について
2. 2007年度センターのプロジェクトについて
3. センターの人事について
4. 2007年度予算（案）について

●配布資料

①2006年度後期活動記録、②センター組織改組（案）、③2007年度センタープロジェクト（案）、④所員・兼任研究員登録（新規・継続）（案）

コーディネート・オフィス
研究企画ボード

慶應義塾大学教養研究センターの運営業務はコーディネート・オフィスが担っているが、研究企画ボードは、その中核をなし、教養研究センターの活動全般についての検討を行う機関である。以下に研究企画ボードの役割と2006年度に研究企画ボードが中心となって企画・運営を行った事業について報告する。

1．研究企画ボードと各セクションならびに各委員会との関係について

2006年度、教養研究センターにはセンター運営の実務業務を担うコーディネート・オフィスが置かれているが、コーディネート・オフィスのメンバーはセンター所員および職員の中から委嘱されたコーディネーターによって構成されている。また、コーディネート・オフィスには、研究企画ボードを中心として調査・研究セクション、交流・連携セクション、広報・発信セクションの3セクションが設置されている。さらに日吉行事企画委員会（HAPP：Hiyoshi Art and Performance Project）、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会の3つの委員会が研究企画ボードとの密接な連携の下で活動を展開している。

中核となる研究企画ボードはセンター所長、3名の副所長、センター事務長、センター所員・職員の中から委嘱された16名のコーディネーターの計21名で構成されている。その役割は、調査・研究活動の企画・運営・支援および統括、研究資金などの導入、内外諸機関との交流・連携の促進、その他センターが主体的に進めるさまざまな事業の母体としての機能を果たすことにある。同時に上記の各セクション、各委員会との連携を保ちつつ、センター全体の運営のバランスを図る調整機能も併せ持っている。

各セクションの責任者には、3名の副所長が各1名ずつ当たり、研究企画ボードと連絡を取りつつ活動を展開する。調査・研究セクションではセンターの調査・研究活動の円滑な進展を支えるための活動とともに、研究・教育の基盤となる教員サポート活動を担当している。交流・連携セクションでは義塾内外に向けた行事の企画・運営、内外機関との交流・連携の促進のための活動を担っている。広報・発信セクションはセンターの活動報告書、シンポジウムなどの報告書、「ニューズレター」、「センター・リポート」などの編集・発行、センター刊行物の企画・発行、HPの作成と管理を行っている。詳細は各セクションからの報告を、また日吉行事企画委員会（HAPP）、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会の活動については下記の記述とともに、各委員会からの報告を参照されたい。

2．2006年度の主な事業

教養研究センターのさまざまな活動はホームページ（http://www.hc.keio.ac.jp/lib-art）でも随時報告されている。参照されたい。

1）教養研究センター公開セミナーの開催

教養研究センターでは国際的に活躍する有識者、および研究者を招いて、日吉キャンパスを中心とした学生に幅広い「知」の体系とそのダイナミズムに触れる機会を提供するための、公開セミナーおよび講演会を随時開催している。なお、これらのセミナーおよび講演会の内容は、「CLA-アーカイブズ」シリーズとして刊行している。2006年度は以下の公開セミナーを開催した。

●教養研究センター　公開セミナー「ミシェル・フーコー使用法」

2006年6月20日（火）に開催された。ミシェル・フーコー・センター所長、フィリップ・アルティエール氏をお迎えし、高桑和已君（理工学部・本セミナーのコーディネーター）の紹介と司会のもと、アルティエール氏の講演を皮切りに、思想史・表象文化史を専門とする新進気鋭の学者たち3名によるそれぞれの「フーコーの使用法」（芹沢一也氏［京都造形芸術大学］、原宏之氏［明治学院大学］、廣瀬純氏［龍谷大学］）が披瀝された。ミシェル・フーコーが現代のさまざまな文化表象を理解する上で果たした役割は実に深く、かつ広範にわたり、それは現代の学問の土台となる重要な礎石のひとつである。今回は研究者のみならず数多くの学生が参加し、熱心に各発表に耳を傾けていた。

なお、本セミナーの内容は「慶應義塾大学教養研究センター　CLA-アーカイブズ8」として刊行されている。そちらも参照されたい。

2）教養研究センター　公開講演会の開催

・世界アーティストサミット関連プログラム「クリスト&ジャンヌ＝クロード講演会：A Work in Progress, Over the River, Project for the Arkansas River, State of Colorado」（2006年10月28日［土］京都造形芸術大学、10月30日［月］慶應義塾大学日吉キャンパス第4校舎J29番教室）

主催：京都造形芸術大学　慶應義塾大学

共催：京都市
後援：国際交流基金　京都市教育委員会

本行事は、今まで3回にわたって行われてきた「来往舎現代藝術展」の実績を踏まえ、京都造形芸術大学と慶應義塾大学が主催者となって行われた講演会である。「現代藝術展」をはじめとし、1、2年生を主体とした慶應義塾大学日吉キャンパスの学生が、アーティストの作品とアーティスト本人に触れるという機会は、「芸術」という言葉によってあらわされるさまざまな固定観念を打ち壊し、新しい物の見方を学生自らが身につけていくきっかけを提供する。

今回の講演者であるモダン・アートの巨匠、クリスト&ジャンヌ＝クロードは、人々の生きる場そのものを巨大な創作活動の場としており、創作のインスピレーションに始まり、多くの人々の関与を経て創作を現実化するその活動は、完成品の短命な存在期間とあいまって芸術の意味そのものを根底から問いただす。その問いを若い学生たち自身にも考えてもらうことが本講演会の大きな目的であった。

今回は講演会を一過性のものとすることなく、広く芸術の意義を問い直す機会として、クリスト&ジャンヌ＝クロードのドキュメンタリービデオ上映会、アーティストから提供されたポスターの展示会、プレ・レクチャーなど、講演会に向けてさまざまなイベントが同時に開催された。特に今回の講演に向けてアーティストお二人との橋渡し役を果たしてくださった京都造形芸術大学副学長の千住博氏には多大な協力をいただいた。千住氏はご本人も塾員であり、著名な日本画家でいらっしゃる立場から、プレ・レクチャーで実演を踏まえながら、クリスト&ジャンヌ＝クロードの作品に触れる学生たちに「表現すること」と「伝えようとする意思」の大切さを語ってくれた。熱心な講演に対し、聴衆からもさまざまな質問が提示され、予定を大きく上回る時間を割いて、千住氏はひとつひとつに丁寧に答えてくださった。

これらのプレ・イベントの効果は10月30日（月）の講演会で確かな手応えとなった。講演会には、学生を中心に予想を上回る聴衆がつめかけ、会場には立ち見の観客も多数出たため、来往舎のシンポジウムスペースと会場をテレビ会議システムでつなぎ、他会場からも質問が受け付けられるように手配した。参加者は600人以上にのぼった。およそ一時間あまりの講演に引き続き、活発な質疑応答が交わされた。その後、場所を懇親会場に移したあとも、クリスト&ジャンヌ＝クロードは大勢の学生たちからの熱心な質問に熱意を込めて答えてくれた。学生たちの生き生きとした顔が印象的であった。

講演会の参加者対象にアンケートを行ったが、内容に関しては非常に高い評価を得ることができた。多くの参加者が見込まれる講演会では、参加者の会場への誘導など、さらにきめ細かな対応が必要である。今後の課題としたい。

この講演会は、単にアーティストと学生をつなぐのみならず、慶應義塾大学と京都造形芸術大学、慶應義塾大学教養研究センターとアート・センターなどの塾内外の他組織がつながる場として機能し、緊密な知のネットワークが構築されたことも特記しておきたい。

［クリスト＆ジャンヌ＝クロード講演会関連行事］

●ドキュメンタリービデオ上映会（解説付き、講師理工学部　石井達朗氏）
2006年10月17日（火）および10月20日（金）

●ドキュメンタリービデオ常時上映
2006年10月17日（火）～10月30日（月）（慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎　イベント・テラス）

●ポスター展示
2006年10月17日（火）～10月30日（月）（慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎　イベント・テラス）

●特別プレ・レクチャー
「芸術とは何か？　クリスト＆ジャンヌ＝クロードの魅力」、2006年10月24日（火）慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎イベント・テラス、講師　京都造形芸術大学副学長　千住博氏

慶應義塾大学での講演会の運営に当たっては慶應義塾大学アート・センターの協力を得、クリスト＆ジャンヌ＝クロード講演会運営委員会によって進められた。運営委員のメンバーは以下のとおりである。

横山千晶（教養研究センター所長）、佐藤望（教養研究センター副所長、交流・連携セクション担当）、近藤幸夫（教養研究センターコーディネーター、理工学部）、熊倉敬聡（教養研究センターコーディネーター、理工学部）、木俣章（法学部）、笠井裕之（法学部）、フィリップ・コミネッティ（商学部）、＊前田富士男（アドバイザー、慶應義塾大学アート・センター所長）

なお、プレ・イベントを含む本講演、および特別プレ・レクチャーの内容は、「慶應義塾大学教養研究センター CLA-アーカイブズ9」として刊行される。そちらも参照されたい。

3）教養研究センター各セクションとの連携

教養研究センター主催の各行事や活動は、企画ボード以外に、各セクション（調査・研究セクション、交流・連携セクション、広報・発信セクション）がそれぞれ責任母体となって、企画ボードとの連携のもとに開催されている。以下の活動については、該当セクションの報告を参照されたい。

●第3回「来往舎現代藝術展　SWITCH」（2006年6月26日［月］～7月7日［金］まで）、交流・連携セクション

●Hiyoshi Research Portfolio 2006への参加（2006年12月15日、16日）、調査・研究セクションの活動をポスター展示で紹介

●シリーズ「開かれゆくキャンパス」（第6回「Hiyoshi Campus Town Meeting ―慶應義塾大学日吉キャンパスにおける社会貢献・地域連携活動の課題―」2006年12月16日［土］開催）、交流・連携セクション

●シリーズ「開かれゆくキャンパス」（第7回「慶應義塾一貫教育の冒険2『福沢諭吉の手紙　朗読会』」2007年2月4日［日］開催）、交流・連携セクション

●FDを考える7「教養教育とは何か―スタンフォード大学における取り組み―」（2007年3月13日［火］、講師　ハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト教授）、調査・研究セクション

●他大学・他機関への調査

東京大学教養教育開発機構訪問（2007年3月16日［金］）、調査・研究セクションとの合同調査

●他大学・他機関からの講師を招いての勉強会

講師は朴世熙氏（国立ソウル大学名誉教授、大韓民国学術委員会会員、慶應義塾大学商学部訪問教授）、「韓国における教養教育について」（2006年11月16日［木］）

●他大学・他機関からの訪問

国立ソウル大学Center for Teaching and Learning（2006年10月10日［火］FDについての意見交換、および学生WEB会議の打ち合わせ）

玉川大学コア・FYE教育センター副所長　菊池重雄氏、山崎千鶴氏（2006年11月7日［火］アカデミック・スキルズ授業参観）

4）教養研究センター設置科目「生命の教養学」（春学期）、「アカデミック・スキルズⅠ」（春学期）「アカデミック・スキルズⅡ」（秋学期）の開講

2006年度は、教養研究センター設置科目として、極東証券寄附講座「生命の教養学」、同寄附講座「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」の2種類の科目を開講した。

前者は「生命の教養学」のシリーズとして、「生命を見る・観る・診る」の副題のもとに、さまざまな分野の講師陣を招いてのオムニバス講座として展開されたものである。後者の「アカデミック・スキルズ」は、教養研究センターの特定研究である学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクト、「リベラルアーツ教育の総合モデル構築」との連携のもとで、2003年度実験授業として開講した「スタディ・スキルズ」を前身としている。2004年度に「アカデミック・スキルズ」と改名、同時に文学部・法学部・商学部で正規科目として単位化が図られることとなった。2004年度の履修希望者の数を踏まえ、2005年度はひとつクラスを増設し、3コマを設置し、看護医療学部にて正規科目として単位化が図られた。2006年度は継続して3コマを設置すると同時に、経済学部で正規科目として単位が認定された。なお、これらの設置科目は「極東証券寄附講座運営委員会」によって企画・運営されている。詳細は同運営委員会の報告を参照されたい。

5）管理部門内調整費「新しい教養授業の支援」

教養研究センターは日吉予算管理部門内調整費調整委員会から委託され、2005年度に引き続き2006年度も「新しい教養授業の支援」事業を行った。具体的には日吉キャンパスを中心とした新しい教養教育の授業開発・実施およびこれに関る作業・成果の発信あるいは既存の授業の改善などを目的とする事業を公募し、効果の期待できる事業に対して資金支援を行ったものである。公募は2回に分けて行われ、1次は総応募数8件、採択8件、2次では応募7件に対し、6件が採択された。なお、採択事業のうち14件に関しては、2006年12月2日（土）に採択事業の成果報告会を行った。

6）慶應義塾大学教養研究センター選書の刊行

2005年度に引き続き、教養研究センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信すると同時に、研究・教育相互の活性化を目指すことを目的として、「慶應義塾大学教養研究センター選書（Mundus Scientiae）」4号の原稿公募が行われた。今回は選定の結果、常山菜穂子君（慶應義塾大学法学部）著『アンクル・トムとメロドラマ―19世紀アメリカにおける演劇・人種・社会―』が刊行された。

7）新入生歓迎行事・極東証券寄附講座・慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座の実施

日吉行事企画委員会（HAPP）、極東証券寄附講座運営委員会、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座運営委員会の各委員会との連携のもとで、一連の新入生歓迎行事および公募企画行事の開催、極東証券寄附講座「生命の教養学―生命を見る・観る・診る」および「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」の開講、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座「自然と科学と人間」の企画および運営に参画した。

8）一般研究プロジェクトの選定

一般研究（共同研究）とは、センターの目的に沿った内容の共同研究で、外部資金などを獲得していて既に一定の業績をあげている、あるいは、将来、独創的な成果が期待できるプロジェクトのことである。2006年度は教養研究センターの所員に対して公募され、選定された以下の一般研究プロジェクトが調査・研究を続けた（カッコ内は研究代表者の氏名と慶應義塾における所属）。なお、公募は単年度ごとで2回まで継続申請ができる。

・「総合的な視野からみた環境問題解析と環境教育の試み」（初年度）（秋山豊子・法学部）
・「Keio NetMath構築による義塾の数理科学教育の統合の試み」（初年度）（戸瀬信之・経済学部）
・「フレーム意味論によるオンライン日本語語彙情報資源の構築」（2年目）（鈴木亮子・経済学部）

9）国際会議への参加および関連シンポジウムでの講演

海外での教育とカリキュラム研究の動向を知ると同時に、教養研究センターで展開されているさまざまな試みについて紹介し、批評を受けるために2006年度は以下の国際会議に参加した。

●2006年7月24日（月）～27日（木）、第19回国際会議The First-Year Experience（カナダ、オンタリオ州、トロント）

本国際会議は大学における導入教育・接続教育をめぐる国際会議としては最大規模のものである。教養研究センターがこれから取り組まなくてはならない課題として、教員・職員・学生の連携、一貫校との連携、1・2年次の導入教育、基礎カリキュラムと専門教科との関係、社会貢献・地域連携の教育への導入などが挙げられるが、それらの課題に対して海外の教育機関がどのような取り組みを行っているのかを知るために、会議およびワークショップに参加したものである。すべてのセクション、および研究発表は参加者との緊密な意見交換の場として機能しており、海外での状況を知ると同時に日本の高等教育のあり方について紹介できるよい機会ともなった。本会議の参加者は横山千晶（教養研究センター所長）、マイケル・エインジ（経済学部）、佐藤元状（法学部）の3名である。今回の国際会議で特に目立った海外の高等教育機関の動向としては、ピア・メンターシステムのさらなる展開として、学部生のピア・リーダーシップと学生同士のつながりを利用した教育補完のあり方、1年次セミナーの充実および担当教員へのサポート、そしてITの教育への応用の3点である。テクノロジーが教育の現場に応用されていくと同時に、学生一人ひとりと空間と時間を共有する教育のあり方を見直し、このふたつのバランスが重要視されている点は、文化を超えて共通の視点といえよう。

●2007年1月26日（金）、玉川大学コア・FYE教育センター主催シンポジウム「一年次教育の可能性―高等教育における役割」での発表

本シンポジウムはコア・FYE教育センターを中核として一年次教育の全学実施を行っている玉川大学が主体となって行われたシンポジウムであり、教養研究センター所長の横山千晶がシンポジウムの講演者、およびパネルディスカッションのパネリストとして参加した。横山は「新たな一年次教育の創造を目指して―慶應義塾大学教養研究センターの実験授業―」の題名で、教養研究センター設置科目の「アカデミック・スキルズ」を中心に「生命の教養学」、身体知実験授業の試みとその趣旨を紹介・説明した。このシンポジウムは、基調講演者にサウスカロライナ大学付属一年次教育研究機関ディレクターのメアリー・S・ハンター氏を迎えて行われ、日米の一年次教育の比較のみならず国内でのさまざまな試みの紹介が講演者・参加者間の活発な意見交換のもとで行われた。このシンポジウムに参加していた各大学の関係者数名がその後、教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」のプレゼンテーション・コンペティションにも参加し、実際に履修者の学生にヒアリングを行うなど、慶應義塾大学での試みを広く知ってもらい、批判を仰ぐよい機会となった。

10）研究企画ボード会議の開催

2006年度は原則として2週に1回の割合で定例会議を開催した。そのほか、必要に応じて臨時会議やメーリング・リストによるメール会議と意見交換を適宜行った。

（横山千晶）

コーディネート・オフィス

調査・研究セクション

2006年度の調査研究セクションの活動は以下のようなものであった。

1. Hiyoshi Research Portfolio（HRP）2006への出展

2006年12月15・16・18日の3日間にわたり日吉キャンパスの来往舎において開催されたHRP 2006に、調査・研究セクションはポスター展示に出展し、主に2005年度後半から2006年度にかけての活動を中心に発表を行った。

各ポスターのタイトルと概要は次の通りである。

①「教養研究センターにおける研究活動とその成果」と題し、新しい教養・教養教育モデルの創出、新たな知の創出といったセンターのミッションおよび主な研究活動を紹介した。

②「国外調査」と題し、韓国のソウル国立大学校、成均館大学校、延世大学校における教養教育およびオーストラリアのシドニー大学、サウス・ウェールズ大学における自然科学を中心とした教育システムなどを紹介し、国外高等教育機関の教育の現状を報告した。

③「国内調査」と題し、1997年より全学共通カリキュラムを実施している立教大学を対象とし、センター組織、実施経過、実態、諸課題などを紹介した。

④「公開授業」と題し、相互に講義・授業の工夫を披露し、理解を深めながら、共に教育の方法・内容の向上を目指す実験的な取り組みを紹介した。

⑤「国際会議The First Year Experienceへの参加」と題し、大学1年生が高等教育にスムーズに適応していくためのプログラムや戦略について議論する国際会議において、研究発表やディスカッションを行ったことを報告した。

2. ハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト氏講演会

2007年3月13日、スタンフォード大学アルベール・ゲラール文学講座教授ハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト先生による講演会「教養教育とは何か―スタンフォード大学の取り組み―」が、石井 康史先生（経済学部）の司会の下で開催された。

講演会の骨子は次のようなものであった。

①多くの国々では、19世紀末以降、人文科学が自然科学をモデルにしながら「科学」の集合体として形成された。

②同時に人文科学は他の学問分野から分離した結果、「世界喪失」という出生のトラウマを抱え込んだ。

③専門知識を教授することが現代の大学の使命ではなく、人文科学に裏打ちされた「リスクフルな思考」の養成こそ、大学は目指さなければならない。

④同一の時間・空間を共有して初めて、学問する上で重要なインスピレーションを得るので、現在流行のオンライン教育は好ましくない。

（報告書CLA-アーカイブズ10『FDを考える7　大学の人文学に未来はあるか』参照）

3. 東京大学教養学部附属教養教育開発機構調査

2007年3月16日、教養教育開発機構執行委員会委員長・教養学部副学部長の山本泰先生を訪問し、次の諸点につきお話を伺い、意見交換を行った。訪問者は横山千晶、中島陽子、佐藤望、萩原眞一、根岸宗一郎の5名。

①教養教育開発機構が初年次の導入教育に関する調査の一環として2005年度に実施したハーバード大学などの視察の成果について、②教養学部と教養教育開発機構との人事的・組織的な関係について。学部と機構の職を兼務した場合、原則として学部の授業負担は3分の2、機構の授業負担は3分の1であり、また大学院重点化の結果、大学院組織が人事権をもっている由、③教材開発について、新学習指導要領の学生向けに、約20冊の教科書（外国語や自然科学など）を制作し、自然科学の教科書は毎年改訂し、新しい情報を追加している由。

（萩原眞一）

コーディネート・オフィス

交流・連携セクション

交流・連携セクションは、日吉キャンパスを拠点とする教養研究センターが、社会や地域、塾内他キャンパスや一貫校などの交流と連携を図りながら、社会における大学の新しい目的を模索するための活動を行ってきた。

2006年度は、1）来往舎イベントテラスを利用した社会や他大学との連携活動としてSWITCH展、2）日吉キャンパスと周辺地域との交流連携事業、3）一貫校との連携として「慶應義塾一貫校の冒険『福澤諭吉の手紙朗読会』」の3つの活動を行った。

1．来往舎現代藝術展3 SWITCH展

SWITCH展は、慶應義塾大学日吉美術研究室および文学部美学美術史学専攻近藤幸夫研究会と東京藝術大学大学院美術研究科保科豊巳研究会とが合同で行った企画である。展覧会は2006年6月26日(月)〜7月7日(金)にかけ、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎ギャラリー、イベントテラスで催された。

これは、教養研究センターの企画の「来往舎現代藝術展」としては3回目で、現代美術の普及と理解を深め、教養教育の一環としての藝術教育のあり方を探るために続けられている。慶應義塾大学理工学部近藤幸夫助教授と東京藝術大学美術学部保科豊巳助教授の指導のもと、両大学の学生が企画・運営を行っていった。作品は東京藝術大学の保科豊巳氏の他、池田嘉人氏、岩井優氏、金銀淑氏、李玉興氏、中村宏太氏、杉山礼香氏、佐藤一岳氏が提供した。

来往舎という場を生かしたさまざまな作品が展示された。ファッションショーや学生生活を作品にすべり込ませる作品、キャンパスそれ自体を象徴する作品、学生の日常生活に直接入り込んでくるようなユニークな作品、ビデオを使い日本人と中国人がお互いをどう見ているかを語る作品などである。

この企画の背後にあるコンセプトは、現代の美術教育において典型的な画一的な感動教育（あるいは感動押しつけ教育）に対する強い警告と反省である。知識だけでなく藝術作品に直接触れ、それを制作する表現者に直接触れるような機会とともに、それを行うための教育メソッドの開発ということもこれから進めていくべき課題として考えられている。

来往舎イベントテラスが数日のうちに、日常と異なる空間に変化し、多くの学生が作品に直接触れて多彩な感動を自ら発見する機会となったことは大きな意義であった。

なお展覧会に併せ、6月28日（水）16:00より来往舎シンポジウムスペースで、「わかりやすい現代美術」と題するシンポジウム（パネリスト近藤幸夫、保科豊巳他）。および、展示に併せたイベント「記憶と布：ファッションショー／ウェアラブルアート　Produced by 保科豊己」が、6月26日（月）19:00より来往舎イベントテラスで開催された。

展覧会カタログは、別途教養研究センターから発行されている。

（佐藤　望）

2．日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携事業

(a)「開かれゆくキャンパス6：日吉キャンパスタウンミーティング」を開催した（2006年12月16日：来往舎シンポジウムスペース）。当日は、教養研究センター「新しい教養授業の支援」事業に採択されている「ヒヨシエイジ2006」、「ボランティア学ってなに！」の活動報告が行われ、この報告を受けて、日吉地域で活動するNPO、ボランティア団体、住民サークル、町内会などの代表者や行政担当者と塾生・教職員が日吉キャンパスにおける社会貢献・地域連携活動の問題点と今後の方針について意見交換を行った。

(b)横浜市港北区「港北ふるさとサポート事業」を教養研究センターが後援し、熊倉敬聡所員が審査員として参加したほか、「ボランティア学ってなに！」が参加団体と学生ボランティアのマッチングに協力し、「ヒヨシエイジ2006」が助成団体として報告を行った。

(c)モトスミ・オズ通り商店街との共催により、小学生を対象とする消費者・事業者教育の実験授業「みんな、お店やさんになろう！「こども商店街」と「お金楽習講座」」を開催した（2006年9月30日・10月1日開催）。

(d)フィールドワーク型教育の実践の試みとして、商学部総合教育セミナー「21世紀の商店街」の学生が横浜市環境創造局との協働取組みとして「横浜型環境ポイント」の日吉での導入実験の企画・実施、およびモトスミ・オズ通り商店街の消費者アンケート調査を行い、それぞれ分析と提言をまとめた報告書を発行した。

(e)「新しい教養授業の支援」採択事業である「ヒヨシエイジ2006」が、9月〜10月に日吉キャンパスおよび近隣小学校などにおいて、住民参加型のさまざまなイベント、ワークショップ等を開催した。

（牛島利明）

3.「一貫教育の冒険２『福沢諭吉の手紙』朗読会」

2005年度の「一貫教育の冒険1　平家物語群読会」に引き続き、2007年2月4日幼稚舎自尊館にて「一貫教育の冒険2『福沢諭吉の手紙』朗読会」が創立150年記念イベントとして行われた。今回は、岩波文庫版『福澤諭吉の手紙』をテキストとし、福澤の建学時の心意気や家族への思い、あるいは同僚や学生との交流などが披瀝されている手紙をいくつか選び、それを幼稚舎、中等部、志木高校の生徒、演劇サークルの大学生、そして塩澤経済学部長、佐藤看護医療学部長、工藤常任理事、横山教養研究センター所長が朗読した。また、塾員の紺野美沙子さんが司会進行と朗読を行った。今回も、前回同様、企画・制作に当たっては、幼稚舎の鈴木秀樹先生と志木高校の速水淳子先生に協力を仰いだ。

本番当日は、同じ社中にありながら、ふだんほとんど顔を合わせる機会もない者同士が、懸命に稽古し合い、互いの声に刺激されながら、自らのパフォーマンスを磨いていくという、一貫教育校ならではの、学びの場が作られていった。結果、前回の群読会に劣らない感動を、聴衆に与え得たのではないだろうか。

（熊倉敬聡）

広報・発信セクションは、教養研究センターの研究成果、教養教育に関する提言等をさまざまな媒体で学内外に発信する活動を行ってきた。2006年度の主な活動は以下の通りである。

1．ホームページ管理

(1) 英文ホームページの制作

センターが設立されて以来、国際的な交流活動も増えてきた。またセンターの活動の海外への発信の必要性も感じられるようになってきた。そこで、本年度、センターの活動を英文で紹介するページを制作した。ホームページは、日本語ホームページとほぼ同じデザインで構成した（図を参照）。ただし、行事予定等の日常的に更新を要する情報は掲載せず、センターの概要と活動の概要がわかるような構成とした。なお、本更新の作業は慶應義塾大学出版会に委託して行った。

新しい英文ホームページ

(2) 日本語ホームページ更新作業

昨年度に引き続き、理工学部学生の田中悠介君に依託し、同君を中心として、ホームページの運営管理が行われ、随時新着情報を更新している。なお、これまでhtml 4.0で運営してきたが、アクセシビリティを向上し、更新作業を簡便にするために、xhtml 1.0, CSSで書き直すという作業も合わせて行った。表面的には見えにくいが、技術的には高度で意味ある更新であった。

2．2005年度活動報告書の刊行

2005年度の教養研究センターに関する報告書をまとめ、7月31日付で発行した。センター全般の1

年間の活動をすべて網羅し、運営委員、コーディネート・オフィス人員、所員・研究員の名簿、1年間の活動カレンダーも掲載した。執筆は各活動内容の代表の方々に依頼した。A4版60頁で、制作は慶應義塾大学出版会に依頼して行った。

3．ニューズレターの刊行

2006年度は、ニューズレターを2回発行した。第8号は2006年7月20日、第9号は2007年1月16日に発行した。ともにA4版8頁である。

第9号からはデザインを更新した。デザイン更新の意図は、教養研究センターの活動について単に網羅的に羅列するのではなく、一瞥して最もインパクトのある活動が、全面に出るようなかたちにし、教養研究センターの活動の意義を広く理解していただくということであった。そこでは、学術フロンティア「超表象デジタル研究プロジェクト」とクリスト＆ジャンヌ・クロード講演会を、それぞれ特集、特別記事として構成した。

第8号の編集責任は広報・発信セクション担当岩波敦子副所長、第9号は後任の佐藤望があたった。編集・校正作業は教養研究センター事務局の高橋純子氏が担当した。制作は慶應義塾大学出版会に依頼して行った。

4．CLA-アーカイブズ刊行

CLA-アーカイブズは、センターによる公開の活動のうち、社会に広く提供するべきセンターの研究成果としてのシンポジウム等の記録を公表するシリーズとして刊行されている。CLA-アーカイブズは、逐次刊行物としてISSN番号（International Standard Serial Number、国際標準逐次刊行物番号）を取得している。2006年度のCLA-アーカイブズの冊子の刊行は、3冊である。

CLA-アーカイブズ8として刊行したのは、CNRS（フランス国立科学研究センター）研究員でミシェル・フーコー・センター所長のフィリップ・アルティエール氏を迎えて6月20日に開催された公開セミナー「ミシェル・フーコー使用法」の記録である。フランス語、日本語の対訳形式で、質疑応答を含む計48頁の構成である。編集は、理工学部の高桑和巳氏が担当した。

またCLA-アーカイブズ9としては、10月30日に行われたクリスト＆ジャンヌ・クロード講演会、10月24日の千住博氏のプレ・レクチャー「芸術とは何か？　クリスト＆ジャンヌ・クロードの魅力」、また、講演会「教養教育とは何か―スタンフォード大学の取り組み」の記録としてCLA-アーカイブズ10「FDを考える7　大学の人文学に未来はあるか」が刊行されることになった。両方とも刊行時期が大幅に遅れてしまった。今後、記録担当者の手配、制作依託会社との事前打合せを詰めるなど、事前の準備に万全を期しつつ企画を進めていく必要性が強くあるという重い課題を残す結果となった。

5．センター選書の刊行

2006年度は、3件の応募があり、厳正な審査の結果、教養研究センター選書第4巻として、本塾法学部助教授常山菜穂子君の『アンクル・トムとメロドラマ―19世紀アメリカにおける演劇・人種・社会』が採択され、2007年3月30日付で刊行された。四六版変形で104頁、制作と出版は、慶應義塾大学出版会である。

（佐藤　望）

コーディネート・オフィス

日吉行事企画委員会（HAPP）

2006年度、日吉行事企画委員会（HAPP）は、例年通り、①新入生歓迎行事と②企画公募行事を開催した。この二つのセクションによる日吉行事企画委員会の活動は、学生・地域住民にも認知され、また事務作業も組織化されて日吉キャンパスに定着しつつある。新入生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を開催した。一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画をHAPPが主催するものである。例年通り、新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終え、実行した。なお、活動内容、委員会メンバーなどはホームページで公開され、随時更新されている。

春学期の新入生歓迎行事で特筆すべきは、「舞踏公演」と「日吉能」である。舞踏公演は、昨年度まで3年間にわたって来校した和栗由紀夫氏に替わり、今年度新たに山本萌氏を迎えて、アートセンターと共催した。山本萌氏によって、DMCプロジェクトとの協力関係ができたことは収穫であった。日吉能では、2006年度も坂井音重氏による充実した能公演が行われた。特に本年は、『隅田川』という大曲を演目にしたことで、例年に増しての入場者があった。指定寄付を含めて、物心両面にわたるOBの協力に感謝している。

秋の公募行事は、応募件数が前年の3分の1に激減した。これを、学生の企画意欲の減退とみるか、HAPPの運営の問題とみるか、あるいは他に理由があ

2006年度入学歓迎行事

1．新入生歓迎行事

企画名	内容	開催日	場所
春の音連れ（おとづれ）―表象として「フランス流花鳥風月」	ピアノ演奏とトークと映像が融合するコンサート	4/21(金) 18:15～19:45	来往舎シンポジウムスペース
講演会「言語でかける橋～グローバル社会における通訳という仕事」	イタリア語通訳／翻訳者・田丸公美子氏による講演会	4/24（月）16:30～18:00	来往舎シンポジウムスペース
舞踏公演「記憶の海」	山本萌氏による舞踏公演	5/10（水）18:00～19:30	来往舎イベントテラスおよびギャラリー
能「隅田川」	坂井音重氏による能公演	5/16（火）18:00以降	来往舎イベントテラス
講演会「旅の途中に」	新入生を意識し、愛校心を深める意味で、活躍する塾員の作曲家・千住明氏講演会	5/30（火）16:30～18:00	来往舎シンポジウムスペース
小松原庸子講演会	小松原庸子氏による講演およびフラメンコダンスの実演	6/21（水）16:30～18:00	来往舎イベントテラスおよびギャラリー
「モーツァルト・フェスティバル―モーツァルト生誕250年記念企画」	フェスティバル形式のポジティブオルガンとフォルテピアノの演奏会を4回行う	☆下記参照☆	来往舎イベントテラスおよびシンポジウムスペース
環境週間	パネルディスカッションや展示講演会などのイベントを開催し環境問題への関心を喚起する	6/12（月）～17（土）	日吉キャンパス

☆モーツァルト・フェスティバルーモーツァルト生誕250年記念企画☆

大塚直哉ポジティヴ・オルガンリサイタル	6/22（木）18：15～	来往舎イベントテラス
上尾直毅フォルテピアノリサイタル	6/30（金）18：15～	来往舎シンポジウムスペース
フルート四重奏のタベ	7/7（金）18：15～	来往舎シンポジウムスペース
18世紀オーケストラの響きⅦ	7/12（水）17：00～	来往舎イベントテラス

2．秋の公募企画行事

〔秋の公募行事〕A Piece of Peace	（企画意図）地雷障害者、エイズ、人身売買など、さまざまな問題が山積しているカンボジア。私たちの団体「Asian Theatre」は、実際にカンボジアに赴き、ボランティアを通じて知り得たカンボジアの人々の「力強さ」をドキュメンタリー映画という形でお伝えしたい。	10/25（水）～26（木）18:00～20:00	来往舎シンポジウムスペース
〔秋の公募行事〕シンキロード～the world of contemporary bellydance～	（企画意図）展示やパフォーマンス、ワークショップを通じ、多角的にベリーダンスに触れ、感じてもらう。それが「自分の身体」や「現代」について体とココロで考えるきっかけとなるような研究もあわせて展示。具体的には、外部団体とコラボした生演奏つきのパフォーマンスとワークショップ、道具や衣装の展示、写真や研究のﾊﾟﾈﾙ展示。	11/09（月）～11（土）	来往舎ギャラリーおよびイベントテラス
〔秋の公募行事〕プロジェクト・エフ～映像におけるエフェクトの世界～	プロジェクタやテレビなどを使用したパフォーマンス。	11/13（月）～18（土）	来往舎ギャラリー

るかを考えつつ、2007年度の公募を実施したい。結果として、2006年度は、5件の応募のうち、3件を採択し実施した。各企画に教職員が担当として付き、企画書の改訂を含めて、丁寧な指導を行った。内容については、アジア志向のもの、ボランティアを話題にしたものなど、学生の真面目な問題意識を反映したものとして、興味深いものであった。

日吉行事企画委員会は、年3回、全体会議（6月、12月、1月）を行い、各企画内では、担当委員、事務局、責任者間で数え切れないほどの打ち合わせを行っている。但し、企画を立案・実行するにあたっては、日吉行事企画委員会は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することを常に留意している。2007年度は、キャンパス内の大規模な工事が始まることもあり、現在、この大方針のもとに、企画を検討中である。

（小菅隼人）

コーディネート・オフィス

極東証券寄附講座運営委員会

1．基本方針

当運営委員会では、2006年度極東証券寄附講座を企画するに当たり、過去の実績と反省点をふまえ、以下のような基本方針で臨むこととした。

①2004年度に正規授業化して成功を収め、2005年度も設置された『生命の教養学』を、引き続き春学期の半期授業として2006年度も開講する。運営委員会で討議を重ねた結果、2006年度のテーマを「生命を見る・観る・診る」とする。前年に引き続きコーディネーター制を継続して責任の所在をはっきりさせるとともに、コーディネーターの一部を入れ替え、これまでのノウハウを継承しつつ当該年度テーマにふさわしい新鮮な頭脳を取り入れる。形式としては、多彩な一流講師陣を揃えられるように、前年と同じくオムニバス講座とする。理系学問と文系学問の対話・交流を心がけ、21世紀にふさわしい生命をめぐる多彩な知の諸相を学生に伝え教える。

②これも2004年度に正規授業化して熱く盛り上がっている『アカデミック・スキルズⅠ』『アカデミック・スキルズⅡ』を継続する。大学での勉強の基本、すなわち講義を聞き、クリティカル・リーディングを行い、そこから自分のテーマを発見し、自らリサーチを行って、その成果を口頭発表したり論文にまとめたりする作業に必要な諸スキル習得のために、少人数の履修学生に複数の教員がついて懇切丁寧に指導する。『Ⅰ』と『Ⅱ』はそれぞれ半期科目ながら、これを続けて履修することで1年かけて本格的なアカデミックスキルを習得することができる。

2．極東証券寄附講座『生命の教養学』

中島陽子、石原あえか、武藤浩史の3名がコーディネーターに任命され、2006年度のテーマ「生命を見る・観る・診る」を講義要綱のサブテーマとして掲げた。以下、講義要綱から引用する――「今年度の講座『生命の教養学』では、『生命をどう捉えるか?』という問題を提起し、これに対して『見る』『観る』『診る』という3つの『みる』という動詞をキーワードに、さまざまな方向から生命について考えたい。（中略）まず基本となるのは、生命を『見る』こと。生物は、世界をどのように捉えているのか。眼に入ってきた情報が視覚として成立する仕組みは?人間と他の動物（たとえば昆虫）の視覚にはどんな違いがあるのか。たとえば驚異的な進歩を遂げた分子生物学領域では、ミクロのレベルで生物の構造や機能が解明されている。最新の光学・電子顕微鏡は『生命のありさま』をどのように可視化したのか。そこから何を見つけたのか。次いで生命を『観る』こと。科学が成立するためには、観察者としての視点形成が不可欠だった。『錯視』という現象は『眼で見る』と『脳で観る』をつなげる格好のテーマではないだろうか。目的を持って生命を観察しようとするとき、どんな方法が可能なのか。そしてまた生命のありさまをいかにビジュアル化できるのだろうか。そして生命を『診る』こと。日々『心で生命をみる、対峙する』プロフェッショナルの方々を通して、たとえば医療の現場における人間存在、臓器移植や心の病（特に鬱病）などの問題に取り組みたい。

講座は、毎週木曜3限に日吉キャンパス来往舎1階のシンポジウム・スペース（6月1日のみ来往舎2階の大会議室）において行われたが、講師とその所属、および講義タイトルは以下のとおりである。

さらに特別公開講座として6月9日（金）に中村桂子JT生命誌研究館館長の講演があった。

4月13日　オリエンテーション
4月20日　蟻川謙太郎（総合研究大学院大学教授）：動物の見る世界を探る
4月27日　岡浩太郎（理工学部教授）：細胞の情報伝達を見る
5月11日　柳沢賢一郎（柳沢情報科学研究所所長）：踊れば生命が見える
5月18日　黒岩常祥（立教大学理学研究科生命理学科教授）：細胞誕生の謎を解く――ゲノムの完全解読から核の戦略を読む――
5月25日　中島陽子（文学部教授）：「みる」ことの生物学
6月1日　北岡明佳（立命館大学文学部教授）：錯視デザインと生命
6月8日　添田英津子（慶應義塾大学病院移植コーディネーター）：Gift of Life（「生命」の贈り物）――移植医療の現状――
6月9日　【特別公開講座　17:30～19:30】中村桂子（JT生命誌研究館館長）：“生きている”と“生きる”を考える――生命誌の視点から
6月15日　下村裕（法学部教授）：たまごを回して観ると?
6月22日　石原あえか（商学部助教授）：人体情報の記録――近代ヨーロッパおよび日本における解剖図・標本・立体模型
6月29日　堀由紀子（新江ノ島水族館館長）：命のつ

ながり――海と命
7月6日　大野裕（保健管理センター＆医学部ストレス・マネジメント室）：自殺対策プロジェクトについて
7月13日　総括

このような講師の陣容が示すとおり、医学、生物学から心理学、物理学、科学史に至るさまざまな分野の第一人者が、「生命をみる」ことについての考えを披瀝した。毎回、その回の責任担当コーディネーターが司会役を務め、多種多様な講義間に有機的な相互連関が立ち現れるように努めた。

3．極東証券寄附講座『アカデミック・スキルズ』

2003年度後期に実験授業として立ち上げられ2004年度に初めて正規授業化された『スタディ・スキルズ』は2005年度から『アカデミック・スキルズ』と名称を変更して継続されている。自ら考え、調べ、論ずることが学問の出発点であるとともに長い人生を送る上で不可欠な「教養」という知的体力涵養の基盤であるという考えに立って、その習得を目指して、具体的問題発見の方法に始まり、リサーチ、プレゼンテーション、レポート・論文執筆のスキルを身につけることがこの授業の目的である。前期開講の『アカデミック・スキルズⅠ』では、まとまった長さの充実したレポート・論文執筆を最終目標として、学問的スキルの基礎訓練に力が注がれ、後期開講の『アカデミック・スキルズⅡ』では、前期の成果をふまえて、レポート・論文執筆とともに、プレゼンテーションのスキルの訓練が行われた。

2006年度は、前年同様、合計3クラスが開設された。担当者は横山千晶、佐藤元状（以上火曜日）、鵜崎明彦、加茂具樹、武藤浩史（以上水曜日）、湯川武、村山光義、伏見岳志（以上金曜日）。履修者の総数は56名。

なお、年度末の2007年2月8日に履修学生の成果を公表すべく、来往舎シンポジウム・スペースにて公開プレゼンテーション・コンペティションが行われた。塾内はもちろんのこと、外部からも日本大学、明治学院大学、法政大学、立教大学などから多数の聴衆を迎え、各クラスから選抜された計6名の学生の口頭発表があった。厳正な審査の結果、プレゼンテーション部門金賞、銀賞、銅賞各1名、奨励賞3名、論文部門金賞、銀賞、銅賞各1名、奨励賞3名が選ばれ、表彰された。聴衆アンケートでは「大変よかった」という評価が大半を占めた。

4．『生命の教養学――ぼくらはみんな進化する？』（全231頁）出版と『生命と自己――生命の教養学Ⅱ』の出版準備

2003年度極東証券寄附公開講座『生命の魅惑と恐怖』の諸講義が『生命の教養学へ』というタイトルの下、2005年2月に上梓されたのに続いて、2004年度『生命の教養学』の講義集が『生命の教養学――ぼくらはみんな進化する?』と題され、慶應義塾大学出版会より2006年10月に出版された。教養研究センターを代表して金子洋之と武藤浩史が編集に当たった。

本書の構成は以下の通り。

序「僕らはみんな進化する?」金子洋之／武藤浩史
第Ⅰ部　進化と性・免疫
「性の進化」団まりな
「免疫の進化」和合治久
第Ⅱ部　進化と歴史・言語
「進化論と医学」鈴木晃仁
「文化的進化論（言語・進歩・進化）」武藤浩史
「進化論とダーウィンの時代」小川眞理子

また、2005年度『生命の教養学』の講義集が『生命と自己――生命の教養学Ⅱ』と題され、2007年4月出版に向けて、作業が進められた。教養研究センターを代表して武藤浩史が編集に当たり、安西祐一郎（「生命と認知」）、養老孟司（「生命と脳と自己」）、河本英夫（「生命の自己制作（オートポイエーシス）」）、斉藤環（「生命と表現」）、秋田光彦（「アート・いのち・仏教」）、椿昇（「アパルトヘイト・ウォールとパレスチナ」）、池内了（「宇宙史における生命」）、中島陽子（「生物学的自己」）、安藤寿康（「心も遺伝的である」）、前野隆司（「ヒトとロボットの心」）、石原あえか（「自然研究者としてのゲーテ」）の各氏の論考が収められる。

5．その他（委員会日程、委員構成）

・2006年度運営委員会会議日程：第1回2006年7月13日
・2006年度運営委員：中島陽子（文学部）、竹内良雄（経済学部）、石原あえか（商学部）、鈴木伸一（医学部）、熊倉敬聡（理工学部）、横山千晶（法学部、教養研究センター所長）、武藤浩史（法学部、委員長）、吉田泰将（体育研究所）、広瀬寛（保健管理センター）、小磯勝人（慶應義塾大学出版会）、吉川智江（教養研究センター事務長）

（武藤浩史）

コーディネート・オフィス

日吉キャンパス公開講座運営委員会

2006年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座のテーマは、「自然と科学と人間」で、その趣旨は、〈自然科学は、自然と無関係に存在するものではなく、また人間の知的働きかけなしに成り立つものでもありません。また、科学と技術は一体化して語られることが多く、互いに密接に関連しているとはいえ、本来は区別して認識されるべきものです。この講座では、長い歴史において人類が営々と築いてきた知的営為の結実としての自然科学の成果、その成果の社会的意義に関する功罪両面からの論議、自然科学の研究を実際に担っている（また担ってきた）多くの研究者の科学への情熱と悩みなど、「自然と科学と人間」の問題について多面的な観点から光を当てることにより、自然科学の意義を幅広い視点から論議することを目指しています。自然科学研究の主たる研究者自身が自己表現をこめて語る「自然科学とは？　自然科学の意義とは？」これが本講座の1つのテーマであり、研究活動の成果とその有り様について考えることがもう一つのテーマです。〉ということであった。

2006年9月30日から12月2日までの毎週土曜日の3時限目と4時限目、全10回を行った。応募者数は、定員300名のうち264名、受講者数は、241名（学生3名）、修了者数は207名（約85.5％）、平均出席率182名（75.2％）、平均年齢は61歳（最高齢86歳、最年少19歳）であった。年齢内訳では、60代が42％、70代以上が29％、50代が18％、40代が7％で、定年退職者が最も多く、しかもリピーター（81％）が多い。男女比では、男性が65％、女性が35％で、横浜市民大学講座のときの「天体と人間」同様に、理系のテーマは男性が多いという傾向がある。住まい、通学時間の内訳によると、横浜市内在住で、30分から1時間以内の方が多い。また東急沿線、渋谷、目黒の近くに住む受講生も見受けられたが、総じて日吉駅近辺の住民が多かった。このことは、地域に開かれた公開講座の役割を十分果たしていることを意味する。問題点は、やはり若年層すなわち20代、30代、40代の働き盛りの人たちの参加が望まれることだ。本講座の情報源としては、大学からのDMが圧倒的で、次に大学ウェブページ、そして知人よりで、新聞、地区センター、駅PRボックス、区役所生涯学習センターがそれぞれ1件だった。受講の動機や目的は、「教養を高めるため」、「趣味や楽しみのため」、「テーマに特に魅力を感じたため」が多く、「仕事や資格取得に活かすため」はわずかであった。

「自然と科学と人間」の企画・立案のコーディネーターは、商学部の表實教授で、趣旨にあるように自然科学者を中心に講師陣を決定した。物理学者が捉えた「自然と科学と人間」は、福澤諭吉の「訓蒙窮理図解（きんもうきゅうりずかい）と太陽と地球・・・」（表實）にはじまり、弟子が語る「湯川・朝永生誕百年（1）―創造性と緻密さによるノーベル賞―」（小沼通二）、「湯川・朝永生誕百年（2）―「科学と社会」に対する取り組み―（小沼通二）、「宇宙の蜃気楼重力レンズ効果―」（表實）、「科学と疑似科学」（下村裕）、天文学の分野から「江戸時代の天文学」（児玉光義）、「『環海異聞』とプラネタリウム」（児玉光義）、生物学の見地から「『年々歳々花おなじからぬ』21世紀」（西村顕治）、「もし生物進化の論が提唱されていなかったら（1）（2）」（団まりな）、「生物科学から見た『科学』の楽しみと『科学』に必要なこと」（秋山豊子）、化学的見地から「植物は光が好き？」（小瀬村誠治）、数学者による「パラドックスとその科学的意義」（竹中淑子）、「数学と文化と社会」（渡部睦夫）、心理学として「自然現象や生き物の動きを見る―ゲーテ的自然学のススメ―」（増田直衛）などの講義がなされた。

他方、文学研究者たちが、「地球を測る―フランス大革命期の天文学者達―（石原あえか）、「科学と“憐れみ”の心―ベルナール主義の陥穽―」（林田愛）、「科学の夜空に舞い上がる吸血鬼―ヨーロッパ啓蒙主義時代の生んだ不可思議な論争について―」（コミネッティ、フィリップ）、「雷―神話的人物から科学者へ」（小潟昭夫）、そして哲学的な考察として「人間は自然？哲学的人間学の視点」（樽井正義）という構成になった。

それぞれの講師陣の言説やプレゼンテーションに、受講者は熱心に耳を傾け、ノートをとり、そして質問に及んだ。テーマがテーマだけにかなり幅広い分野の講義となったが、アンケートの満足度は満足32％、やや満足53％、どちらでもない9％、やや不満足4％、不満足2％であった。今後の講義内容への希望としては、「文学・歴史」、「社会問題」、「法律・経済」、「芸術・趣味」の順であった。運営委員会としては、講座の複線化、より少人数のセミナー、土曜以外の曜日の6時限目の活用、講座のプロジェクト化など検討中である。

（小潟昭夫）

（p.46に日吉キャンパス公開講座受講者のアンケート結果を掲載）

公開セミナー

「ミシェル・フーコー使用法」

2006年6月20日（火）17時から来往舎シンポジウムスペースにおいて、小シンポジウム「ミシェル・フーコー使用法」を開催した。

話の発端は、ミシェル・フーコー・センター所長でもあるCNRS（フランス国立科学研究センター）研究員のフィリップ・アルティエール氏が来日するという情報が在日フランス大使館から入ってきたことである。何か面白いことが企画できないかとの個人的な打診に対し、不精者のくせに楽観主義者である性分の私は先のことも考えずに「いいよ」と言ってしまった。すぐに後悔したが、幸いなことに教養研究センターが全面的にバック・アップしてくれるという決定がさまざまな方のご助力を受けて得られ、企画がなんとか動きだした。

だが、単にアルティエール氏のありがたいお話を拝聴するというのではつまらない。知ってのとおり、偉い人（とくに外国人）を招いて講演をお願いし、それを聞きっぱなしにするという慣例が昔から存在している。「現代思想」の分野でもそれは顕著だが、私はそのような典礼めいた悪習にうんざりしていた。ましてや自分がそんなものに荷担するなど論外だ。しかも、当のアルティエール氏がセンター長を務めるアーカイヴの源泉は誰あろうミシェル・フーコー ── 自分の思想を道具箱に譬え、哲学を使いまわすことにこだわった人である。やってはならないことは明らかだった。

他方、やるべきことも明らかだった。フーコーについて言えば、近年、単なる読解や応用を超えた実践的研究が全世界でおこなわれるようになり、日本語でも優れた研究が読めるようになってきている。この機会にそのようなフーコー読解の可能性を簡潔な形で紹介することは、日吉で学ぶ学生や教員、また一般の聴衆にフーコーへの、ひいては「現代思想」への有効な再接近を促すことになる。

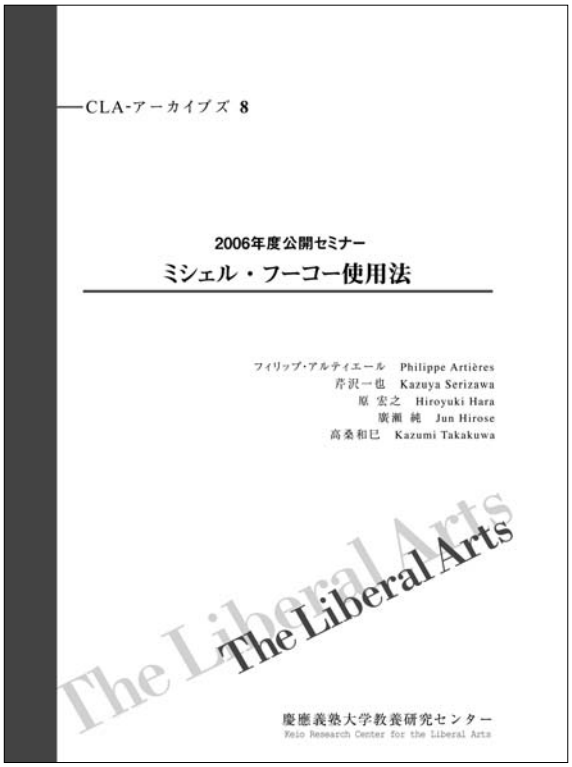
そこで、アルティエール氏の他に3人の研究者に、フーコーを使うということをテーマにしてご自分の研究との関わりを紹介していただくことにした。発表者をお願いするにあたって基準とした諸点を挙げれば、狭義の「フーコー研究者」ではないこと、にもかかわらずフーコーを暗黙のうちにであれ参照して独自の研究を進めていること、若手であるにもかかわらずすでに一般読者に向けて発言を始めていること、である。いわば実質本位のフーコー・チルドレン ── そんな人がいるのかと思われるかもしれないが、芹沢一也、原宏之、廣瀬純の各氏はその条件を文句なしにクリアしている。安心して打診し、それぞれ即座に快諾を得ることができた。

問題は集客である。かなり短期間に準備をしたので、そこが正直なところ心配だった。インターネットやメールでも宣伝したが、教養研究センターの高橋純子氏に作っていただいたポスターが効果を発揮したのだろう、当日は幸いにも会場がちょうど一杯になる盛況ぶりだった。一般の方、学生、教員、他大学の研究者、編集者など、いろいろな人がいらっしゃった。

アルティエール氏を含めた4名の方には「初学者」が聴衆の大半であることをあらかじめ伝え、わかりやすいご発表をいただけるよう念を押した。もちろんそれなりのハードルは残ってしまうが、会場の集中は4氏の発表のあいだ途切れることがなかったように感じられた。

発表・応答にはフランス語と日本語を適宜自由に用いた。急遽通訳をお願いした小林新樹・菊池歌子の両氏のおかげで、発表者・会場ともに言語の壁を感じることなく議論に没頭することができたように思う。

当日の発表の内容を簡単にまとめておく。アルティエール氏の発表は、この哲学者自身についてではなく彼が関わった無名の人たちについて多くを語ってくれるという、フーコーのアーカイヴの特異性を紹介するものだった。芹沢氏の発表では、フーコーの貢献を知



と制度の複合体を明らかにするものと整理されたうえで、犯罪被害者の登場と少年犯罪の誇張から犯罪の厳罰化が導かれている、現代日本社会に特有の複合体が分析された。原氏からは、フーコーの言説分析がその後たどった歴史の解説に続き、「言説編成」の分析と「発話行為」の分析の統合の必要性の主張、また映画分析の実際の紹介をいただいた。廣瀬氏は、ラテン・アメリカでの「アウトノミア」の諸展開を理解するうえで重要なのは言説的なもの（地域・国家的水準）と非言説的なもの（コミュニティ的水準）の格差自体に迫るということであり、それはちょうどフーコーが記号と言説の疎隔として明確化したものと一致するという指摘をされた。

当日の模様は、教養研究センター発行の「CLA-アーカイブズ 8」にあたる報告書『2006 年度公開セミナー ミシェル・フーコー使用法』にまとめた（日仏 2 カ国語版）。このデータは pdf ファイルとして以下の url からも入手できる。〈http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/journal/cla8.pdf〉

唯一悔やまれたのは時間不足である。残念ながら当日は質疑の時間が充分に取れなかった。だが、このイヴェントからはその後、実のある展開が生じてもいる。現在、発表者の芹沢氏とコーディネイターの私が共編者となり、1970 年代後半のフーコーの思想を実践的に読解する論文集『フーコーの後で』を編んでいるところである（慶應義塾大学出版会より近刊）。刮目して待たれたい。

（高桑和巳）

公開講演会

クリスト & ジャンヌ＝クロード 講演会企画

現代アートの最高峰と目されるクリスト & ジャンヌ＝クロードが 7 年振りで来日する機会を捉えて、京都造形芸術大学と慶應義塾大学で講演会を開催することとなった。これは、2005 年 11 月に開かれた国際シンポジウム「世界アーティストサミット」の関連プログラムの一環として企画されたもので、京都市が共催し国際交流基金などが後援者に名を連ねている。高名な日本画家であり京都造形芸術大学国際芸術研究センター所長の千住博氏はまた塾員でもあり、今回の企画に関して義塾とのコラボレーションを強く要請されたこともあって実現の運びとなった。慶應義塾大学側では、教養研究センター内に委員会を設け、横山千晶所長の陣頭指揮のもと、アート・センターに協力を仰ぎつつ精力的に各方面との折衝に当たるとともに、講演会を盛りたてる特別プレ・レクチャー、ドキュメンタリービデオ上映会、ポスター展示など啓蒙的な周辺行事をも含めてその実施に尽力した。

クリスト & ジャンヌ＝クロードといえば、60 年代初頭から公共建造物などを包み込む、いわゆる「梱包(パッケージ)」芸術を提起して欧米の美術界に新風を巻き起こし、以来半世紀近くにわたって、世界各地の歴史的記念建造物や広大な自然景観を相手に膨大な時間と費用を投じた「エクスポジション」を展開して、未だその芸術行為への執念の衰えることのない、まさにわれわれ同時代を代表する巨匠である。日本でも 1991 年 10 月に常陸太田市周辺の谷地に、直径 8.66 メートルの青色の傘を 1340 本も立て込むという、途方もない展覧行為を遂行して私たちを驚かせた。

講演会は、2006 年 10 月 30 日 17 時から、日吉第 4 校舎 29 番教室で開催されたが、当日は、会場前に長蛇の列ができるほどの盛況で、立ち見を含めて 600 名収容の 29 番教室は早々と満杯になった。収容しきれない人々のために、来往舎のシンポジウムスペースを

あらかじめ用意してあったが、そこにも熱心な聴衆がつめかけた。この種の講演会にこれほどの参加者を得たということは例外的でもあり、とりわけ、学生をはじめとする若い聴衆が大半を占めたのは、教養研究センターの企画としては今回が初めてであろう。

会はまず主催者を代表する横山千晶教養研究センター所長の英語による挨拶で始まった。予定ではこのあと、千住博氏からクリスト＆ジャンヌ＝クロード両名の紹介をかねて一言話をしてもらう手はずになっていたが、所長挨拶が終わるやいなやすぐさまジャンヌ＝クロードがマイクを取り「みなさん、こんにちは」と口を切り見事なつかみをみせた。順番は入れ替わったが千住氏にも無事挨拶をしてもらったそのあとは一気に、偕老同穴のご両人による巧みな話術と、両氏と親しい美術評論家柳正彦氏の流暢なその通訳に引き込まれていった。

スライドを用いた両氏の講話は、これまでの芸術行為のプロセスと現在進行中の《オーヴァー・ザ・リヴァー、コロダド州、アーカンサス川のプロジェクト》に関する最新のプレゼンが骨子になっていた。両人の芸術行為は、そのアイデアに始まってエスキス、具体的なプランニング、調査、行政当局との折衝、資材と人材の調達、実地作業、完成、展覧、撤収と、実に遠大なプロセスを要する。その過程の総体が彼らの芸術行為なのである。現実風景の中に彼らの営為の結果が忽然と出現するのに四半世紀を要することもあり、しかもその展覧は蜻蛉の命、総じて2～3週間である。そのあとは、跡形もなく自らの手で取り壊し夢の如く消滅せしめてしまう。かくも膨大な時間と費用・労力をつぎ込みながらもその残骸さえも消し去ってしまう芸術とは？後半に用意された質疑応答コーナーでは、会場から引きも切らない質問が出た。彼らの芸術行為に対する驚きと率直な疑問で精神が揺さぶられた証であろう。二人は、自分たちの芸術行為は、何のためでも誰のためでもなく、おのれの抱く夢の実現にのみその目的があると、意気軒昂に答えていたのが印象的であった。

その後のファカルティラウンジでの懇親会では、クリストとジャンヌ＝クロード二人を幾重にも囲む若者の輪ができ歓談の花を咲かせた。今回の企画の成功を裏付ける情景であった。

なお、10月24日に、来往舎イベントテラスで行われた千住博氏の特別プレ・レクチャー「芸術とは何か？――クリスト＆ジャンヌ＝クロードの魅力」では、多くの学生が参画するなか、千住氏が大きなキャンバスを前にして3名の塾生と芸術行為を共同で実践しながら、芸術の営みの何たるかをつぶさに語って、講演会への見事なイニシエーションを果たした。

千住氏に最大の敬意を捧げるものである。

また、10月17日、10月20日の2度にわたって行われた、石井達朗理工学部教授を講師とするドキュメンタリービデオ上映会や、来往舎イベントテラスでのポスター展示も講演会を補強する知的で篤実な試みとして大いに評価すべきであろう。教養研究センター職員の並々ならぬ尽力も逸することはできない。

（木俣　章）

（運営委員メンバーはp.9に掲載）

研究活動

基盤研究①
カリキュラム研究

研究目的

基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」は、2005年度から2カ年にわたって研究を行ってきた。その目的は、大学の環境が変化するなかで、大学が次代に伝えていくべき知の体系および教養のあり方を再検討するとともに、現在慶應義塾大学で行われている教育カリキュラムの在り方を検証し、今後あるべき大学カリキュラムに関する提言を行うことであった。

研究活動内容

2005年度には、現在の各学部のカリキュラムの状況に関するヒアリング調査や、大学カリキュラムに関する識者を招いての勉強会に重点を置いていたが、2006年には、2005年度より着手していた4つの大規模な調査を完成させた。すなわち、1）日吉の諸科目における成績評価に関する調査、2）学部カリキュラムの比較調査、3）カリキュラムに関する学生アンケート調査、4）米国のリベラル・アーツ・カレッジのカリキュラム調査である。

『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究―改革への処方箋』（28項目の提言）

以上の調査をもとに、2006年度末に最終報告書『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 ― 改革への処方箋（2005～2006年度基盤研究報告書）』（A4版203頁）を完成させた。

この報告書では、まず前半でカリキュラムに関する28項目の提言を掲げている。これらの提言は、1）成績評価方法、2）セメスター制度、3）履修登録制度、4）講義要項（シラバス）、5）日吉設置学部共通科目の新しいあり方、6）外国語科目における習熟度別クラス編成の導入と整備、7）副専攻制度、8）カリキュラムの国際化、9）人事とカリキュラム編成に関するものである。

報告書の後半は、上記に掲げたアンケート調査の詳細な結果とデータ分析が掲載されている。いずれの調査もこれまでほとんど行われることのなかった本格的な学事に関する調査であり、とりわけカリキュラム関連事項の項目を中心とする学生へのアンケート調査は、無作為抽出の手法を取り、更に各部署の全面的協力を得て行われた。その意味でもこの調査は慶應義塾大学の現状を知る上で非常に貴重なデータを提供している。

2005年度は、幹事会4回、研究会9回（勉強会、講演会、調査ヒヤリング、合宿を含む）が開催された。2006年度は、それぞれの調査グループの個別の会合を除き、幹事会3回、研究会6回（合宿を含む）が開かれた。

本研究会のメンバーは次の通りである。

大場茂、倉田敬子、坂本光、納富信留（2005年度まで）、石井明（幹事）、伊藤行雄（座長）、林田愛（2006年度から）、岩谷十郎、大久保教宏、木俣章、小屋逸樹、鈴木透、種村和史、佐藤望（幹事・教養研究センター副所長）、小町谷尚子（2005年度まで）、鈴木由紀（2006年度から）、金田一真澄（座長代理）、萩原眞一（幹事・教育研究センター副所長）、太田達也、村山光義（幹事）、倉舘健一、小磯勝人（慶應義塾大学出版会）、横山千晶（教養研究センター所長）、近藤明彦（教養研究センター副所長）、岩波敦子（教養研究センター副所長）、田上竜也（教養研究センター副所長、2005年度まで）、中島陽子（教養研究センター副所長、2006年9月から）

報告書の目次は以下の通りである。

ごあいさつ
はじめに

第Ⅰ部　研究報告編
序
第1章　提言
1. 成績評価方法の厳格化に向けて
2. セメスター制度、シラバス、履修登録制度
3. 日吉設置学部共通科目（総合教育科目）の新しいあり方
4. 外国語科目における習熟度別クラス編成の導入と整備
5. 副専攻制度の全学的導入
6. カリキュラムの国際化対応
7. 人事とカリキュラムの編成組織
第2章　提言の背景
1. カリキュラム目標に対応した成績評価方法のあり方
2. セメスター制度、履修登録、シラバス問題
3. 日吉設置学部共通科目（総合教育科目）の問題点
4. 外国語科目における目的別・習熟度別クラス編成と客観的成績評価方法の導入
5. 副専攻制度

6. カリキュラムの国際化対応
7. 共通カリキュラム調整組織と人事
第3章　調査およびデータ分析の報告
1. 学部カリキュラムの比較分析
2. 成績評価方法に関する実態調査
3. 米国のリベラル・アーツ・カレッジのカリキュラム調査報告
4. 「慶應義塾大学における学部カリキュラムに関するアンケート」の分析と考察

第Ⅱ部　資料編
資料1. 学部カリキュラムの比較分析
資料2. 成績評価に関する実態調査
資料3. 米国のリベラル・アーツ・カレッジの理念調査報告および調査資料カリキュラム比較分析
資料4. 「慶應義塾大学における学部カリキュラムに関するアンケート」調査結果報告

活動記録
研究会メンバー

なお、2007年度春学期中に、本研究にもとづく報告の「シンポジウム」を開催する予定である。

（伊藤行雄）

研究活動

基盤研究②
身体知プロジェクト

1. 基盤研究「身体知プロジェクト」の研究目的

昨今哲学的および芸術的な意味を超えて、「身体論」や「身体知」という言葉がいろいろな場面で語られるようになってきている。そこで対象になるのは単に肉体としての身体のみならず、人間をホリスティックにとらえた上での身体であり、当然ながらそこには精神性や感情論も含まれてきている。このような身体に対する議論の背景には、時代の突きつけるひとつの危機感があることは否めない。つまりこれはテクノロジーの波の中で希薄化する身体存在やコントロール不可能な精神・感情・不安といった諸現象であり、それらの危機感は教育現場で切実に意識されているものでもある。

同時に教育に関わるものが、人間の諸活動は、すべて「身体」を抜きにしては語れないという事実を明確に再認識し、その意識を共有していくことも重要であろう。そのような見地のもとに、21世紀の中で私たちが再建もしくは発見すべき「身体」は何であり、それをひとつの「知」とした上で次世代に伝えていくにはどのようにしたらよいのかを教職一体となって考える場として2005年に発足したのが、本プロジェクトである。ここでは、上に述べた基盤に立った上で身体知教育の実践と理論化を試み、広く外部に発信することを目標としている。具体的な研究手法としては、理論構築と平行した実践を行うことにより、常に理論を見直す作業を繰り返すことで、既存・および議論されている理論の有効性を確認しつつ、慶應義塾発の新たな「知」のあり方を提言したいと考えている。

2. 2006年度の活動内容―実験授業「体をひらく、心をひらく」

2006年度は2005年度に行った月例研究会、および講師を招いてのワークショップを通じて得た知見を元に、実験授業を立ち上げた。

コミュニケーションは言語のみを通じて行われるものではない。発信者は絶えず自分の身体そのものを使ってさまざまな情報を発信している。時にその発信は自分でも気がつかないうちに行われていることも多い。その意味で常に自己は他者であり、またその他者性は自己にとっては不可解でありつつも、限りない豊かさをはらんでいる。この実験授業はさまざまなメディアを使って自己表現を行うことで、自分の、そして他者の身体と心を解き放ち、その潜在力・豊かさを発見し、味わい、さらに繰り広げていくことを主眼とした。

メディアとしてはダンス、コラージュ、連句、瞑想など

の多様な手法を用いて、呼吸、所作、造形といった根源的な身体行為の意味を問い直し、その可能性を探求した。そして、それを「体験」するだけでなく、言語やイメージを通してその体験を絶えずディブリーフィングし、共有することを各授業の最後に行った。

なお、今回は実験授業のあとにファシリテーターとしての講師を中心とした振り返りを行うと同時に、各授業を映像と音声、および観察者によって記録して、それぞれの内容の分析も行った。同時に講師を招いての研究会を開催し、実験授業の土台となる教育的な意義とこれからの展望について議論した。

以下、具体的にその授業内容を紹介する。

実験授業「体をひらく、心をひらく―新しい実験授業へようこそ」

（日時）2006年9月29日～2007年1月12日までの隔週金曜日　17時～19時

（対象）塾生（学年・年齢を問わない）、教職員

（コーディネーター）熊倉敬聡（教養研究センターコーディネーター、理工学部）、手塚千鶴子（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター）

（協力者）高山緑（理工学部）

第1回　2006年9月29日　オリエンテーション

第2、3回　2006年10月13日、27日　メディテーション

ファシリテーター：　井上ウィマラ（高野山大学）

第4、5回　2006年11月10日、17日　コラージュと連歌

ファシリテーター：　佐藤仁美（放送大学）

第6、7回　2006年12月8日、22日　ダンス

ファシリテーター：　岩下徹（京都造形芸術大学、「山海塾」メンバー）

第8回　2007年1月22日　まとめのセッション

ファシリテーター：　井上ウィマラ、佐藤仁美

（参加者について）

実験授業の参加者募集は2006年7月より開講の直前までポスター、チラシ等で行うと同時に、授業開始後も参加希望者を受け入れた。参加者の人数は各回20名前後であった。もともとの対象者は塾生と塾の教職員であったが、それ以外にこのような試みに興味を示してくれた他の小・中学校の教師、カウンセラー、出版編集者などが参加したことで、振り返りや研究会もより広い展望をもった活発な意見交換の場となった。その反面、一貫校の学生が時間帯が遅いせいで参加できなかったことが反省点である。

（実験授業の分析について）

今回の実験授業では各回の最後に語ることによるディブリーフィングを行うと同時に、「行った内容」、「セッションの進め方」、「気づいたこと（自分やその他について）」、「グループについて感じていること（今後の期待も含めて）」、「戸惑いや実際にして欲しかったことなど」、「印象に残ったこと」の項目について簡単な感想文を提出してもらった。またすべてのセッションが終わったあとに、参加者に総括振り返りレポートを提出してもらった。そのレポートの内容を、コーディネーター、ファシリテーターで共有し実験授業の意義を省みた。

（今後の課題）

実験授業のコーディネーターおよび基盤研究「身体知プロジェクト」のメンバーにとって、今回の実験授業への参加は、自分の内面と向き合う新たな発見の場を提供してくれた。また、各参加者のディブリーフィングと感想文から、他者がまったく自分とは異なる反応と感情を経験していることを、メンバーは自らの経験と比較して省みることができた。同時にこのような経験の必要性をあらためて自分の身を通して確認した次第である。身体を通した「時間」と「場」とを学生と教職員が共有することで、教育の可能性はより広がるであろう。また言語以外の新たな表現を体験することで、自分の身体を見据え、さらにそのバリアを超えて他者とつながる可能性を体感する機会は、大学教育の、特に導入教育の部分で、短期間でよいので集中的に行われるべきだと思われる。来年度以降は、さらに新たな表現ツールを実験授業の中に組み入れながら、身体知教育のカリキュラム化を考察していく予定である。

（横山千晶）

学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクト

教養研究センター特定研究にあたる学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクトは2006年度に3年計画の2年目を迎えた。

リベラル・アーツ教育（教養教育）の新たなモデル構築を目的とする本プロジェクトは、統合研究ボードを中心として、「学びの内容と形態」のモデル開発を目指すコンテンツ研究ユニット、「学びの場」のモデル開発を目指す「学習環境構築研究ユニット」、研究活動の円滑化のためのプロジェクト・メンバー間のコミュニケーション・プラットフォーム構築と研究成果のデジタル化発信の基盤作りを目指す「デジタル化研究ユニット」から構成されているが、本年度は主としてユニットごとの課題に即した研究活動を行った。

「コンテンツ研究ユニット」については、①導入教育、②身体知教育、③温故知新型教育、④現代の危機的問題教育の各研究グループがそれぞれに実験授業・ワークショップを実施し、その知見をもとにした授業モデルの構築作業を進めた。具体的には学生を主体としてこれに教員が参加・協力する形の「半学半教プログラム」として実施された「奇術心理学」の実験授業、中国語履修者と中国からの留学生を交えて中国の教科書に見られる日本関連の記述をめぐるディスカッションを軸とした実験授業、身体と心の解放を通じて自己や他者の再発見を目指すワークショップ、フィールドワークを主眼としたいくつかの授業の実施や授業開設のための準備作業などが挙げられる。

「学習環境構築研究ユニット」については、①バリアフリー・キャンパス構築、②インター・キャンパス構築、③デジタル・コミュニケーション・キャンパス構築の各研究グループがキャンパスの現状分析や問題点の解決方法あるいは新しいキャンパスのあり方の模索について多角的に研究活動を行った。具体的にはバリアフリーの連続セミナーやシンポジウムの開催、教員と学生、卒業生などを交えてキャンパスの未来像を探るワークショップ、新しいタウン・キャンパスのモデルとして三田キャンパス近くに開設した「三田の家」における活動、フィールドワーク型授業のためのマニュアル・機材セットの作成・開発、授業履歴や学生の学習履歴を中心としたネット上での教員と学生のコミュニケーションを可能とするポータルサイトの開発などを挙げることができる。

「デジタル化研究ユニット」については、本プロジェクト全体の情報交換、活動のスケジュール管理、活動に関するドキュメント類の作成とアーカイブ化、研究関連資料のDB化など多彩な機能を有するhydi（hyper digital interface）の基本的な開発作業をほぼ終了し、同時進行的にプロジェクト・メンバーによるより効果的な利用のための運用面での実験・修正を重点的に行った。特にプロジェクトの一環として実施される各種実験授業やワークショップに関する広報、終了後の報告を初めとして、統合研究ボードなどから発信されるドキュメント類のアップの迅速化・正確化を図るための態勢について再点検と必要な改善を行った。

研究活動の詳細については、統合研究ボード以下、各研究ユニットや研究グループの活動報告に譲るが、2006年度については、全体としては各ユニット、各グループ共にきわめて活発な活動が展開されたと自負している。とりわけ、コンテンツ、学習環境については、それぞれに学生を取り込んでの議論や企画が行われたこと、また両ユニットの活動からリベラル・アーツ教育（教養教育）におけるフィールドワークの重要性が浮き彫りとなり、そこから両ユニットの協働作業による新たなプログラム開発の可能性が生まれたことなど、総合的なリベラル・アーツ教育（教養教育）モデル案の作成にとって有意義な成果を得ることができたと考えている。

さらにこうした活動の成果をもとに、最終年度となる2007年度における最終成果報告の準備作業として、統合研究ボードが中心となって「新たなリベラル・アーツ教育（教養教育）のモデル案」を提示するための理論、具体的なプログラム案やキャンパス構想の原案作りを取りまとめ、これを言語化すると同時に視覚化するための議論を本格的に開始した。とりわけ成果の視覚化に関しては、3DCGを用いたプロトタイプの作成まで行った。2007年度は成果の集約に向けて、これらの作業を集中的に進めていくつもりである。

（研究代表　羽田　功）

統合研究ボード

ボード代表者　羽田　功（経済学部）

Ⅰ．研究の概要

①リベラルアーツ教育（教養教育）モデルのメタ理論を構築する。
②モデル実現のためのキャンパスデザインを行い「21 世紀型キャンパス基本構想」を策定する。
③プロジェクト全体の活動を統括し、最終的な成果を取りまとめる。
④国内外の共同研究機関との連携をはかる。

Ⅱ．2006 年度活動報告

統合研究ボードは、以下の課題をもって 2006 年度の活動を行った。すなわち、①リベラルアーツ教育（教養教育）モデルの理論的枠組みを構築する、②モデル実現のためのキャンパスデザインを行い「21 世紀型キャンパス基本構想」を策定する、③プロジェクト全体の活動を統括し、最終的な成果を取りまとめる、④国内外の共同研究機関との連携をはかる、⑤研究活動をより活性化させ、成果の質的な向上をはかるために、プロジェクトの活動について外部からのアドバイス、評価を受けるための機会を設定する。

具体的には各ユニットの活動状況を把握することを中心に、プロジェクト全体に関わる案件（たとえば活動報告会、プロジェクト全体会議、研究員人事、予算、プロジェクト内の研究活動の連携促進のための企画など）について議論、解決を図るために統合研究ボードを 7 回開催した。

さらに 2006 年 4 月 22 日には「2005 年度活動報告会」を開催した。この報告会には、プロジェクト外部（塾内）から各学部日吉主任、外国語教育研究センター所長を招いて成果に対する評価と共に今後の研究活動のためのアドバイスをお願いした。また、7 月 18 日にはプロジェクトメンバー全員を対象とした全体会議（3 回目）を開催し、あらためてプロジェクトの全体方針の確認と今後の活動計画について議論を行った。11 月には 2 回にわたり、超表象デジタル化研究ユニットとの共催で、hydi の利用者講習会を実施した。

さらに 12 月には HRP（日吉リサーチ・ポートフォリオ）のポスター・セッションに参加して研究活動の成果に関する途中経過の報告を行った。また、各ユニット、各研究グループによる実験授業、ワークショップにボードとして積極的に参加することで、研究活動全体の状況把握と連携可能性の模索を行った。2007 年 1 月から 3 月にかけては最終成果報告の 3DCG によるヴィジュアル版作成を目指した準備作業に入り、プロトタイプを作成した。なお、2007 年度は最終成果取りまとめ作業を集中的に進めていくつもりである。

Ⅲ．2007 年度活動計画

①リベラルアーツ教育（教養教育）モデルのメタ理論の最終案を作成する。
②各ユニット、研究グループの活動とその成果を統合する。
③ 3DCG の最終版を作成する。
④最終成果を「21 世紀型キャンパス基本構想―新たなるリベラルアーツ教育の構築を目指して」（仮）としてまとめる。
⑤ HRP への参加、最終報告会とシンポジウムの開催など成果の発信を行う。

【研究メンバー】
羽田　功（経）、佐藤　望（商）、近藤明彦（体研）、熊倉敬聡（理工）、境　一三（経）

コンテンツ研究ユニット

ユニット代表者　近藤明彦（体育研究所）

Ⅰ．研究の概要

コンテンツ研究ユニットの目的は、教養教育の新たなモデル構築にあたり、教養教育モデルを構成するコンテンツの開発研究とその統合理論研究を行うことである。本ユニットでは以下の4つの課題を取り上げ、それぞれの課題についてコンテンツそのものを吟味するとともに、新たな教養教育を構築する際にその指針となるべきモデルを提示することを目的としている。

(1)導入教育プログラム「知との遭遇」研究グループ

大学入学初頭の導入教育に関する問題の吟味とその教育プログラムを開発。

(2)「温故知新」型教育プログラム「日本の教養」研究グループ

伝統的な「知」の体系に関する統合研究と実践。

(3)「身体知」教育プログラム「心と体と頭―経験と理論の融合論」研究グループ

体験・経験型教育プログラムの開発研究とその実践。

(4)「現代における危機的問題」を扱う融合的な教育プログラム研究グループ

さまざまな現代的課題に対応した融合的教育プログラムの検討と実践。

Ⅱ．2006年度活動報告

2006年度のコンテンツユニットは各研究グループがそれまで個別に行ってきた研究成果をもとにした実験的な授業の展開およびさまざまな講演・シンポジウムを行った。これらの事業に対する評価・反省をもとに事業最終年度の活動が展開される予定である。以下に、各研究グループが行った主な活動を示す。

【導入教育】

「高大連携に関する慶應義塾大学との意見交換会」（小樽商科大学）2006年4月28日、「イギリス・ウォリック大学マイケル・ベル教授の講演『公然の秘密―教育、権威、ルソーからニーチェまでの小説』」2006年6月26日、「体をひらく、心をひらく―新しい実験授業へようこそ」2006年9月29日～2007年1月12日（隔週金曜日、計8回）、玉川大学特色GP採択記念シンポジウム「一年次教育の可能性―高等教育における役割」2007年1月26日。

【身体知教育】

「慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会」2006年12月20日、「慶應義塾大学教養研究センター実験授業第1回～3回：奇術心理学」2006年10月18日～2007年1月12日。

【温故知新】

「学塾としての慶應義塾1：慶應義塾入門―SFCの試み」2006年10月26日、「ワークショップ：フィールドワークを考える」2006年9月21日。

【現代の危機】「模擬授業『現代中国における民族意識の諸相』」2006年12月19日、「映画上映と佐藤真監督講演会」2006年11月7日。

---

(1)導入教育プログラム「知との遭遇」研究グループ

研究代表者　横山千晶（法学部）

Ⅰ．研究の概要

大学とはさまざまな「知」と遭遇する場所である。しかしその「知」とはいったいどのようなものなのだろうか。教育のコンテンツを考えるということは、まずこのさまざまな「知」について考えることにほかならない。「知との遭遇」研究グループでは大学1,2年次で、どのような知との遭遇が考えられるのを、以下の5点に絞ってみたい。

1. 自分を知る
2. 他人を知る
3. 異なった意見の対立と交流から創造される新たな知の世界に出合う
4. 「経験」を通して学んだ知を体得する
5. 時間と空間を越えたさまざまな知をつなぎ合わせる

このようなさまざまな「知」を自ら体系的に組み立てていくことが、大学の入り口をくぐった学生にとって重要なスキルとなるはずである。この研究グループでは、大学入学時の学生を、大学で提供される知の体系にいざないつつ、なおかついかにして新たな知のアイデンティティを確立させるのか、という方法の模索を研究テーマとしている。

Ⅱ．2006年度活動報告

(1)導入教育の授業の開発（担当：武藤浩史）

①「生命の教養学―生命を見る・観る・診る」の授業の立ち上げ

文系と理系を超えてひとつのテーマを考える授業を、グループ・メンバーの武藤浩史がコーディネーターとなり、極東証券寄附講座運営委員会との協力のもとで授業を組織した。

②「アカデミック・スキルズⅠおよびⅡ」の内容の開発

極東証券寄附講座運営委員会と協力して、教養研究センター設置講座「アカデミック・スキルズⅠおよびⅡ」の授業内容の開発を行った。また、その内容をほかの大学の同系列の授業の運営と比較し、意見交換の場を持った（[関係会議への参加・発表]の項を参照のこと）。

③「アカデミック・スキルズⅠおよびⅡ」の次のステップを模索

教養研究センターで設置している「アカデミック・スキルズⅠおよびⅡ」で基本的なリサーチ能力と発信能力を身につけた学生が次のステップへと進む「アカデミック・スキルズ」応用編の内容を、考察した。そこでの話し合いは、2007年度以降の設置科目に反映されることを目標とする。

④「身体知」の定義と実験授業の実施

基盤研究「身体知プロジェクト」とタイアップして、「自己を見つめ、他者を知る」スキルとその方法を実験授業を通して模索した。グループ・メンバーの武藤浩史と横山千晶が授業に参加し、各授業の振り返りにも関わった。

(2)「感動教育」としての芸術教育の講演会開催と研究・調査（担当：横山千晶）

①アーティストによる特別講演会の実施

教養教育の中で、芸術教育の持つ意義をアーティストによる特別講演を通して考えた。具体的には、2006年10月24日（火）に開催された千住博氏によるワークショップ、および10月30日（月）に開催されたクリスト&ジャンヌ=クロード講演会、およびその講演会の一環であるさまざまなイベントが挙げられる。

②芸術教育の歴史と社会貢献に関しての実施調査

芸術教育の意義をロンドンのイースト・エンドで行われた労働者対象の芸術教育の歴史の中に跡付ける現地調査を行った。

● 2007年3月5日（月）～10日（土）

●調査先：

（3月6日［火］～7日［水］）The Hyman Kreitman Research Centre（Tate Britain, Millbank, London）のアーカイブ

（3月8日［木］～9日［金］）同上リサーチ・センター図書館

今回の調査の目的は、20世紀初頭および中期のイギリスにおける一般庶民に対する芸術教育のあり方を調査することであった。当時のイギリスは、芸術教育の体系化において先導者であったからであり、リベラル・アーツの過程で大学生に芸術のあり方を教える上で本調査は、重要な意義を持つ。具体的な調査の内容は以下のとおりである。

a. セツルメント運動の中心、ホワイトチャペル界隈における芸術教育、および20世紀初頭の芸術教育のあり方を調査

b. 同じく労働者地域において芸術教育に関わっていたモリー・ハリソンの資料を調べることで、20世紀半ばからの芸術教育および美術館のあり方に関わる議論を調査

③芸術教育と地域貢献に関する学会での発表

2005年度からの研究に基づき、以下の学会での発表を行った。

● 2006年10月16日（日）（Gongju, South Korea）
International Conference on Arts & Welfare
Chiaki Yokoyama “Whitechapel and Art Education for the Working Class: Art Produced in the East End”

●発表内容

イギリスのトインビー・ホールを中心にしたイースト・エンドの労働者に対する芸術教育を取り上げ、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのセツルメント運動に端を発する社会連携・地域貢献の歴史を考察する発表を行った。

④芸術教育と地域貢献に関する学会でのコメンテイター

● 2007年3月3日（土）～4日（日）（大阪国際会議場「グランキューブ大阪」）
国際フォーラム「工芸運動と芸術の近代」
第5回国際デザイン史フォーラム

今回の会議は2006年10月16日（月）にグループ・メンバーの横山千晶が参加し、発表を行った国際会議「芸術と福祉」と関連して行われたものであり、工芸運動と社会の関わりについて、各国の例をケース・スタディとして紹介しつつ、議論が展開されたものである。横山は、イギリスとインドの工芸文化と社会についての発表のコメンテイターを務めた。

(3)他大学の調査（担当：武藤浩史、横山千晶）

慶應義塾大学における導入教育の検討にあたって、小樽商科大学の先進的な「高大連携」および「キャリア教育」について具体的な内容や取り組みを聴取し、今後の研究活動に役立てることを目的とした調査を以下のように行った。小樽商科大学の「高大連携」「キャリア教育」の取り組みは、慶應義塾大学の今後の導入教育・教養教育のあり方を模索していくうえで大きなモデルとなり得ると感じた。また、FD の観点からも参考になる意見を聴取することができた。今回の調査には慶應義塾大学出版会の小磯勝人氏が同行した。

●2006 年 4 月 28 日（金）～4 月 29 日（土）

●内容

①小樽商科大学の「入試広報・高大連携専門部会」のメンバー構成とこれまでの活動実績について、なかでも『15 歳からの大学入門シリーズ』発刊に至る経緯や手稲高校での夏期連続講義の実施状況について説明を受けた。

②上記取り組みの成果や反応、さらに導入教育「知の基礎系」への関わり等について多角的に質疑応答を行った。

③また『読売ウイークリー』誌上で紹介された小樽商科大学の「キャリアデザイン 10 年支援プログラム」に関しても説明を受けた。

(4)メンターシップの歴史の研究会開催（担当：武藤浩史）

教育の歴史を知る試みとして、マイケル・ベル教授（ウォーリック大学、イギリス）をお迎えして講演会「公然の秘密―教育、権威、ルソーからニーチェまでの小説」を開催した（2006 年 6 月 26 日［月］）。本講演会のコーディネーターと司会はグループ・メンバーの武藤浩史が担当した。

(5)関係会議への参加・発表（担当：武藤浩史、横山千晶）

①国際会議 The First-Year Experience への参加

●2006 年 7 月 24 日（月）- 27 日（木）、第 19 回国際会議 The First-Year Experience（カナダ、オンタリオ州、トロント）

海外での教育とカリキュラム研究の動向を知るために高等教育における導入教育の国際会議としては最大規模の First-Year Experience の会議にグループ・メンバーの横山千晶が参加した。

導入教育の見地から特に今回の国際会議で注目した海外の高等教育機関の動向は、ピア・メンターシステムのさらなる展開として、学部生のピア・リーダーシップの導入と学生同士のつながりを利用した教育補完の開発、および社会連携・地域貢献の教育の充実である。ピア・メンターシステムは「アカデミック・スキルズ」への応用が今後考えられる。社会連携・地域貢献に関してはその歴史と実践を調査するために視察を行った（［Service-based Learning の調査・研究］の項を参照のこと）。

②2006 年 9 月 5 日（火）、関西国際大学主催「初年次教育を活用した教育改革の可能性」

関西国際大学、同志社大学、名古屋大学でのそれぞれの初年次教育の試みを紹介し、意見交換を行うシンポジウムに参加した。初年次教育の受け止め方は大学によって異なり、スタディ・スキルズ系の科目の内容も異なる。互いの教育内容から学びあえる点は大いにあることを確認した。

③2007 年 2 月 19 日（月）、同志社大学教育開発センター導入教育ワークショップ「新入生の学習意欲を高めるための方法―名古屋大学の初年次教育事例」

名古屋大学高等教育研究センター近田政博氏を講師に迎えてのワークショップに参加した。名古屋大学の初年次教育プログラムの概要と、同大学の新入生向けに用意されたスタディ・ティップスの制作について、その過程と苦労話、今後の課題などが提示された。スタディ・ティップスの作成では名古屋大学は草分け的な存在である。有志の教員たちが集まって教育を考えていくというエネルギーは小樽商科大学の高大連携にも通じるものがある。教員たちのエネルギーをどう組織化していくのかの好例であった。

④2007 年 1 月 26 日（金）、玉川大学コア・FYE 教育センター主催シンポジウム「一年次教育の可能性―高等教育における役割」での発表とパネル参加

本シンポジウムはコア・FYE 教育センターを中核として一年次教育の全学実施を行っている玉川大学が主体となって行われたシンポジウムであり、グループ・メンバーの横山千晶がシンポジウムの講演者、およびパネルディスカッションのパネリストとして参加した。横山は「新たな一年次教育の創造を目指して―慶應義塾大学教養研究センターの実験授業―」の題名で、教養研究センター設置科目の「アカデミック・スキルズ」を中心に「生命の教養学」、身体知実験授業の試みとその

趣旨を紹介・説明した。このシンポジウムは、基調講演者にサウスカロライナ大学付属一年次教育研究機関ディレクターのメアリー・S・ハンター氏を迎えて行われ、日米の一年次教育の比較のみならず国内でのさまざまな試みの紹介が講演者・参加者間の活発な意見交換のもとで行われた。このシンポジウムに参加していた各大学の関係者数名がその後、教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」のプレゼンテーション・コンペティションにも参加し、実際に履修者の学生にヒアリングをするなど、慶應義塾大学での試みを広く知ってもらい、批判を仰ぐよい機会となった。

(6) Service-based Learning の調査・研究（担当：横山千晶）

社会連携・地域貢献としてのサービス・ラーニングの歴史と実態を調査するために、大学生のセツルメント運動の発祥の地であり、今も学生を中心にロンドンのイースト・エンドで地域貢献活動を展開しているトインビー・ホールを中心に、社会連携のありかたを調査した。(2007年1月28日[日]～2007年2月3日[土])

III. 2007年度の研究計画

(1) 導入教育のカリキュラム作りとフォローアップ調査

極東証券寄附講座運営委員会、および基盤研究「身体知プロジェクト」との協力により、「アカデミック・スキルズ」や身体知の実験授業を通して、導入教育のコンテンツを考察すると同時に、今までの実験授業の成果のフォローアップを行う。

(2) 導入教育・接続教育の調査・研究

・国内の関係研究機関との協力をはかる

・導入教育に関する国際学会への参加

International Conference on First-Year Experience (2007年7月9日[月]～12日[木]、ハワイ、ビッグ・アイランド)

・一貫教育校との提携

基盤研究「身体知プロジェクト」と協力し、一貫教育校の教員とともに身体に対する気づきに関する研究を進める。また、同時に実験授業を行い、その成果の分析を行う。

(3) 教員サポートのあり方と、教員のネットワーク作りの環境を以下の点から考える。

・教育上の課題の共有の場を作る。

・課題にあわせたワークショップや話し合いの場をどのように設定したらよいのかを考える。

(4) 学習環境構築研究ユニットとの協力

教育とはコンテンツのみならず、「場」の共有を意味する。その点から、2007年度は特定研究の「学習環境構築研究ユニット」との協力関係を強める。

【研究メンバー】

横山千晶（法）、武藤浩史（法）

【研究協力者】

ヒョン・G・リュー（リード大学、アメリカ合衆国）

---

(2)「温故知新」型教育プログラム「日本の教養」研究グループ

研究代表者　岩波敦子（理工学部）

I. 研究の概要

「温故知新」型「日本の教養」プロジェクトでは、既存の「知」の体系や知的財産がどのように形成され、受容・蓄積・継承されてきたのかについて、1）歴史的考察を行い、2）現状を見極め、3）提言することを目指している。

II. 2006年度活動報告

2005年度は「専門教育から見た教養教育の現状と課題」、「法の中の教養/教養の中の法」という2回のシンポジウムを通じて、既存の「知」の体系がどのように形成され、受容・蓄積・継承されてきたのかについて知見を共有することができた。

2006年度は前年度得た知見を基にして、現在慶應義塾の中で行われているさまざまな教養に関わる試みを紹介し、教育の現状を確認する作業に終始した。ひとつは「フィールドワーク」を通じた自己発見型の授業1）であり、もうひとつは先人の知恵と生き方から学ぶ自己啓発型授業2）である。

1）としてワークショップ「フィールドワークを考える―今後の授業展開に向けて」を2006年9月21日（水）14～16時、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにて開催した。プログラムは以下のとおりである。

司会　岩波敦子氏　本塾大学理工学部助教授

取組みの紹介1：「プロジェクト型フィールドワーク教

育の課題」本塾大学商学部助教授　牛島利明氏
取組みの紹介 2：「方法としてのフィールドワーク」
本塾大学経済学部助教授　柏崎千佳子氏
取組みの紹介 3：「授業の経験から」本塾大学経済学部助教授　大平哲氏
ディスカッション
挨拶　羽田功氏　本塾大学経済学部教授・「超表象デジタル研究」代表

2）として、「学塾としての慶應義塾 1　慶應義塾入門―SFC の試み」と題し、慶應義塾大学看護医療学部教授山内慶太氏をお迎えし、SFC 全学部生に対し開講されている授業についてご紹介いただいた。
日時：2006 年 10 月 26 日（木）18 ～ 20 時
場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階大会議室
講演者：山内慶太氏（本塾大学看護医療学部教授）
コメンテーター：佐谷眞木人氏（恵泉女学園大学人文学部助教授）
西村太良氏（慶應義塾大学常任理事）

1）ではフィルドワークに対する意識や捉え方の多様性を再確認し、サポート体制の整備が急務であるという共通認識を得た。
2）では、建学の精神を学生たちにきちんと伝えることで、大学で学ぶ意義を考えるいい機会を提供できるという好例を紹介していただいた。
いずれの勉強会も、それぞれレポートのかたちで記録している。1）、2）ともそれぞれの勉強会で得られた知見を土台に実験的試みを 2007 年度は行う予定である。

III．2007 年度の研究計画
2007 年度は、2006 年度の活動を通じて得られた知見を出発点に、高等教育の現場での教養教育の問題点と課題を克服する、実験的試みの構築に向けて、現在それぞれ準備している。
1）フィールドワークに関しては、経験知獲得の場として、現在その重要性が再認識されつつあるフィールドワークを、高等教育のカリキュラムとしてどう構築していくべきなのか、セミナー授業を通じその課題と問題点を洗い出していく。
2）研究者として独自の領域を切り拓いてきた先生方に、ご自身の学知の軌跡を通じて語っていただきながら、既存の思考様式にとらわれず、自由な発想を持ちながら常に「自分らしさ」を追い続けることのすばらしさを学ぶ機会を、実験的講演会シリーズ「塾生入門―scientia、科学、サイヤンス」として提供する。

【研究メンバー】
岩波敦子（理工）、田上竜也（商）、佐谷眞木人（恵泉女学園大学人文学部）
【研究協力者】
岩谷十郎（法）

（3）「身体知」教育プログラム「心と体と頭―経験と理論の融合論」研究グループ

研究代表者　近藤明彦（体育研究所）

I．研究の概要
【問題の所在】
総合大学は、①定期的に（4 年毎に）交代する若い学生集団が集うキャンパスがあること、②異分野の研究者集団が一つの場所に集まっていること、③学生、研究者、職員、住民が一つの地域に集まっていること、という他に類をみない環境を持っている。この大学の特殊な環境を考える時、カリキュラムや制度化された研究実践に加えて、異世代、異分野、異職種、さらに地域まで含めての多くの身体知的実践の教育・研究上の潜在的価値は明らかである。勿論、身体知的実践は、これまでも行われきたが、その場限りの試みで体系化されておらず、身体知の教育的伝承も行われてこなかった。
【目的】上記の問題意識にたって、本プロジェクトは以下の三点について研究を展開する。
（1）教養教育としての身体知教育モデルケースの構築
（2）教養研究としての身体知教育実践の蓄積
（3）研究成果としての身体知教育の公開・共有
【期待される成果】
（1）「大学の境界」についての示唆が得られること。
（2）身体知教育の蓄積と公開についての示唆が得られること。
（3）教育における身体知の可能性についての示唆が得られること。
（4）自発的動機付けを促し、自主企画の実現が促進で

きること。
【方針】教育は、まず学生にモデルを示すこと、研究は対象となるデータを収集することから始まるとする基本理念にたって、現在進行中の教育実践および過去に行なった身体知教育の収集、整理、蓄積を通して上記目的を達成する。第二に、モデルケースの構築と蓄積に不足した部分を見極めた上で新たな可能性に向けての模索と実験を行う。2007 年度は、まとめの年度と位置づけ、作業の完了、アーカイブを使った教育・研究方法の検討、研究公開方法の検討を重点的に行う。

II．2006 年度活動報告
(A) 以下のモデルケースの取り込みがほぼ完了（①～④）、あるいは、半分以上完了（⑤）した。
(1) 実践モデル①：大野一雄舞踏公演
(2) 実践モデル②：映画上映会「アリア」
(3) 実践モデル③：パフォーマンス「色即是空」
(4) 実践モデル④：日吉エイジ
(5) 実践モデル⑤：演劇「能楽公演」
(B) 新たな身体知の展開として半学半教プロジェクト「奇術心理学」を実践した。これは、学生と教員の立場を逆転させ、学生自ら課外活動で得た趣味とカリキュラムで学んだ心理学を融合させた実験授業である。時間は、いずれも 5 時限終了後の 6 時 15 分から通常授業の一コマ分（90 分）とした。初回は実験的に会議室で行ったが、第 2 回目、第 3 回目は一般の教室を使った。担当学生は、自らポスターを作り、課外活動で得た人間関係を利用し広報を行った。
(1) 第 1 回　2006 年 10 月 18 日、来往舎中会議室
(2) 第 2 回　2006 年 12 月 1 日、J21 番教室

III．2007 年度の研究計画
(1) アーカイブの構築作業の完了
●入力作業の完了（実践モデル①～⑤について）
●“宝箱”への試験的入力
(2) メタ・データモデルの作成
●メタ・データ項目の整理
●メタ・データ項目の入力
(3) アーカイブを使ったワークショップ、報告
●身体知と教育の現場：大野一雄舞踏公演〈シンポジウム〉
●身体知と教育の現場：日吉パフォーマンスアーカイブに向けて〈報告会〉
(4) 公開・共有方法の検討
●紹介版映像の作成（全体、モデルとしての舞踏公演と日吉能）
●公開・共有方法の検討
●著作権処理の検討

【研究メンバー】
近藤明彦（体研）、小菅隼人（理工）
【研究協力者】羽田　功（経）、小潟昭夫（経）、林栄美子（経）、石井　明（経）、横山千晶（法）、内海雄介（早稲田大学大学院国際情報通信研究科）、内田伸哉（慶應義塾大学大学院理工学研究科）

(4a)「現代における危機的問題」を扱う融合的な教育プログラム「信じる？ ── 現代の民族・宗教問題」

研究代表者　湯川　武（商学部）

I．研究の概要
本研究グループは、本プロジェクト全体の中心的な課題の一つである、「知」の連鎖体系を基盤とした一貫したシステマチックなリベラル・アーツ教育（教養教育）プログラムの構築（コンテンツ研究ユニット）の一翼を担うグループである。そのユニットの中でも、現代の危機的問題の理解と解決のために、既存の「知」の体系や知的財産をどのようにして組み直し、これを発展・応用させていくことができるかということを課題とする「融合複合型表象研究」（発展・応用型の「学び」）に属している。

さらに、本グループはさまざまな「危機的問題」のうちでも、特に現代の世界できわめて重大な問題となっている「民族」「宗教」を取り上げて、前述のような展望の下に、具体的なコンテンツを検討するとともに、教育的な効果の高い実践的プログラム（授業モデル）を開発することを研究の目的としている。

II．2006年度活動報告

2006年度の「民族・宗教」研究グループの研究活動の概要は以下の通りである。

(1) 高等学校の社会科各科目の指導要領および教科書を通じて、大学入学時の学生たちの「民族」や「宗教」に関する知識を調査した。

その結果、日本の高等学校教育においては、そしてこれは当然高等学校以前の中学校・小学校にもあてはまることであろうが、「民族」とか「宗教」の問題は、個別断片的な知識としてごくわずかに教えられているに過ぎず、「国家」や「地域」という概念の中に取り込まれてしまっていることが明らかになった。

(2) (1)を参考にしつつ大学の教養教育として「民族・宗教」の問題に関して、何をどのように（教育の内容と方法）教えればよいかということを、種々の条件を考慮に入れつつ検討した結果、以下のような結論に達した。

①平均的な学生の視野（世界観）を考慮に入れ、自分たち以外の人間集団（民族あるいは国民）の政治経済を含めた生活や文化がどのようなものであるかを深く考えさせる。

②当面の対象としては、世界の諸民族と宗教を広く扱うよりは、日本を中心としたアジア地域（東アジア・東南アジアなど）、あるいは現在の日本人といろいろな意味で比較対照ができるように、海外に移民した日本人集団など、学生たちにとってともかく入り口として関心を持ちやすい集団を扱うのが適当であろう。

③民族学あるいは、宗教学・政治学・比較文化学・社会心理学など、民族や宗教を一般的理論的に扱うディシプリンを総合講座的に教えるのではなく、そのようなディシプリンを踏まえつつ、民族や宗教の実態をより具体的に、かつ個別の事例を羅列するだけではなく、より大きな総合的な観点から論じていくよう努めることが重要である。

④そのような内容を持つ授業を効果的に展開するためには、授業方法にさまざまな工夫が必要である。授業の方法と形式・教材・学習効果の測定と評価・FDなど多くの要素について、検討と事前準備が必要であることを確認した。

(3) そのような教育を支えるために大学図書館にはどのような参考文献があるかを調べた。

日本の教育において、民族や宗教の問題が大きく取り上げられていないことは、日本の社会自体がそれらの問題に大きな関心を持っていないことを示している。そしてそのような関心の不在は学問にも反映されており、OPACの検索による参考図書調査の結果は、(1)(2)で述べたような授業の参考になるしっかりした文献がそれほど多くはないということを示している（詳細については、hydiに収録されている参考文献目録を参照のこと）。

(4)「民族・宗教」に関するアクチュアルなテーマを取り上げて、学生たちの関心を喚起する啓蒙的活動を行った。

現代世界において、民族や宗教に深く関連する深刻な問題の一つとしてパレスチナ問題がある。パレスチナ出身の英文学者で文芸評論家でもあり、また自ら知識人としてパレスチナ問題に深く関わり発言を続けてきたエドワード・サイード（2003年没）の自伝に基づく映画「エドワード・サイード　Out of Place」（佐藤真監督、2005年）の上映会と佐藤監督を囲むシンポジウムを6月に開催した。多くの学生や一般参加者を集め、問題関心を喚起するのに効果があった（上映会報告および同資料を参照のこと）。

(5) これまでの検討の結果をふまえて「民族」をテーマとした模擬授業を行った。

12月には、本研究グループのメンバーである関根教授（文）を中心にして、「現代中国における民族意識の諸相」というテーマで模擬授業（90分）を行った。参加学生は20数名で、事前のアンケート、事前教材配布を行った上で授業に臨むというやり方をとった。授業の進め方としても、これまでにないやり方をとったので、教員の側にもとまどいや失敗があったが、それらを含めて検討を行い今後の授業の進め方の参考にすることにした（授業風景、学生の授業評価アンケート、事前の教材などはhydiに収録）。

III. 2007年度の研究計画

①2007年度7月以降3回にわたり実験授業を行う。

②テーマとしては「在日韓国人の問題」「中国のキリスト教」「移民社会における民族意識・文化」などを考え、講師候補を数名挙げ検討した。また、12月には日本との関連も含めて「宗教と民族」をテーマに締めくくりのシンポジウムを開催する。

③教材作成や授業の進め方など、正規の授業として展開するために必要な事柄を押さえた上で、2008年度開講の準備も進める。

【研究メンバー】

湯川　武（商）、臼杵　陽（日本女子大学教授）、長堀祐造（経）、関根　謙（文）

(4b)「現代における危機的問題」を扱う融合的な教育プログラム「先端をキャッチ！── 現代科学の行く先を考える」

研究代表者　鈴木晃仁（経済学部）

I. 研究の概要

本研究では、現在の科学で問題となっている分野についての講義のためのコンテンツ、特に教材と講義を組み立てるスケジュールの例を作ることを目的としている。文系、理系と言った壁を越えて扱う教育、そしてまたそのような壁を越えなければならないような重要な分野を取り扱う。実際の教育現場で使う教材を作成し、そしてそれをさまざまな形態の講義に対応できるようなものにすることを心がけている。

II. 2006年度活動報告

鈴木と青木はそれぞれの専門分野の経験と知識を活用した分野で教材を作ることに主に力を注いだ。鈴木は現代医学の問題、特にAIDSの問題について、そして青木はエネルギー問題に関する教材と科目のベースを作成した。グループには、それぞれの分野の専門知識があり学位を持つ研究者が研究協力者として積極的に参加し、議論、そして教材作成に加わった。

鈴木グループは講義に用いるAIDSに関する電子的な資料を数百ページ作成した。日本、そして世界の様々な地域におけるAIDS問題の経緯と現状をさまざまな統計データと個別のケースの経験などを含めて扱った。

青木グループはエネルギー問題に関する200ページ程度の資料を作成した。これはエネルギー問題と地球気候変動の問題の自然科学的な側面の解説を基本として、これらの問題の様々な側面についての考察を含んでいる。この教材の一部は実際に青木が2006年度の日吉で講義に用いている。さらに、ディスカッション型など様々な講義に対応することも念頭に置き、いくつかの重要なテーマ（エネルギー資源、原子力の安全性に関する考察、など）についてのデータをともなった資料を作成した。

我々の作成した資料は超表象デジタル研究プロジェクトのhydiのシステムにデジタルコンテンツとしてアーカイブしてあり、学術フロンティア研究グループ内で容易に共有し、共同研究が行いやすい状態にしてある。

我々の活動では科学的な側面が大きい現在の重要かつ深刻な問題を扱っていると考えている。また、AIDSの問題、そしてエネルギー問題のどちらにしても、科学の問題では全く閉じていず、社会的な問題、制度的な問題、倫理的な問題、そして経済的な問題と様々な側面が密接に入り組んでいる理系、文系の枠を越えた問題である。

III. 2007年度の研究計画

2007年度は2006年度までの研究成果を元として、それをさらに発展させていく。特に、教材の内容を見直し、さらに内容を充実させていく。そして、新しい関連するテーマの教材を作成する。また、さまざまな形態の講義にも対応できるように、その題材となるような重要なテーマごとの資料もさらに作成していく予定である。これらの活動のために、2006年度に引き続き、専門知識を持つ研究者が研究協力者として参加する予定である。

【研究メンバー】

青木健一郎（経）、鈴木晃仁（経）

学習環境構築研究ユニット

ユニット代表者　熊倉敬聡（理工学部）

Ⅰ．研究の概要

本ユニットの研究目的は、教養教育の新たなモデル構築にあたり、そのコンテンツが最大限の意義を発揮できるような学習環境としての大学・キャンパス像を描き出すこと、また大学・キャンパスが内在させる「学びの場」としてのさまざまな可能性、コミュニケーションの潜在的多様性を探ることで、これまでにない大学・キャンパスを構想することにある。本ユニットでは、以下の四つの研究プログラムが展開されている。「バリアフリー・キャンパス構築―心・身体・頭・モノのバリアフリー」、「コミュニケーション・キャンパス構築―自律的学習支援ポータル・プログラム」、「テクノ・キャンパス構築―秋葉原クロスフィールドと結んで」、「インター・キャンパス構築―解体・逆転・再生の入れ子型キャンパス」

Ⅱ．2006年度活動報告

(1)ユニット会議（2006年7月5日、日吉キャンパス来往舎）。ユニット内プロジェクト間ないし他ユニットとの連携について議論。研究員の久納が、21世紀的キャンパスデザインの参考となる国内外の事例を紹介。

(2)ユニット・ワークショップ（2006年3月12日、日吉キャンパス533教室）

教員と学生約20名により、①大学外の社会ないし地域とのインターラクション、②制度的・社会的・心理的バリアフリー、③書物の文明からデジタルメディアの文明へ、④言語化された知と言語化されない知（身体知）という観点から、21世紀的学習環境を探究した。

Ⅲ．今後の展望

上記ワークショップにおいて、改めて「半学半教」というテーマがクローズアップされ、それをいかに21世紀的学習環境へと具現化していくかが今後の課題となろう。また、統合研究ボードを中心に推進されている3DCGによるキャンパスデザインに、その具現化をどのように適合させていくかも、今後の課題となろう。

(1) バリアフリー・キャンパス構築

研究代表者　増田直衛（文学部）

Ⅰ．研究の概要

本研究の目的は、バリアフリーの観点から学習環境の構築に関する実践的な研究を実施することである。ここでは、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由等の身体障害のある学生や教職員のみでなく、対人関係やコミュニケーション等に障害を感じている学生／教職員も含めた広義のバリアフリーを実現するための実践的な研究を行う。また、バリアを軽減するための具体策の分析を通して、バリアという現象の理解やその生成メカニズムについて明らかにする。さらに、バリアフリーに関するキャンパス内外の様々な研究や教育活動との連携も試みる。

2006年度は、(1)軽度発達障害の理解と支援に関するセミナー・シンポジウムによる主として意識上のバリアフリーに関する研究、(2)感覚障害のある学生への支援実践を通した情報・文化面でのバリアフリーに関する研究、(3)障害学生支援への学内での組織作りやカリキュラム化を通した制度のバリアフリーに関する研究、(4)キャンパスの物理的バリアを解消する物理的バリアフリーに関する研究を実施してきた。

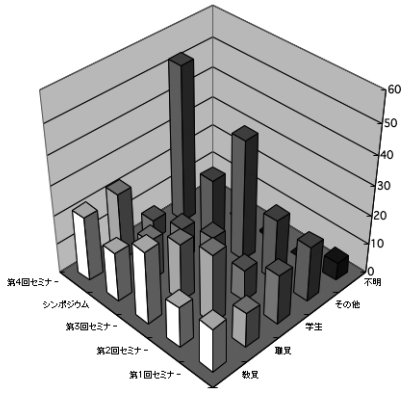
Ⅱ．2006年度活動報告

(1)軽度発達障害の理解と支援に関するセミナー・シンポジウムの開催

「軽度発達障害の世界を知る―思春期・青年期の生きにくさへの理解と援助に向けて―」と題して、思春

セミナー・シンポジウム参加者の内訳

	第1回セミナー 2006年6月23日	第2回セミナー 2006年7月7日	第3回セミナー 2006年10月20日	シンポジウム 2006年12月16日	第4回セミナー 2007年1月12日
学内	34	30	38	29	26
学外	29	40	63	34	79
不明	6	0	1	0	1
計	69	70	102	63	106



期・青年期における発達障害の症状の理解と適切な支援について連続公開セミナーとシンポジウムを開催した。第1回セミナー（2006年6月23日）69名、第2回セミナー（2006年7月7日）70名、第3回セミナー（2006年10月20日）102名、第4回セミナー（2007年1月12日）106名、シンポジウム（2006年12月16日）63名、延べ410名の参加があった。

（2）感覚障害のある学生の支援実践を通した文化・情報面でのバリアフリーに関する研究

中途失明した視覚障害学生の復学支援、ノートテイクが必要な聴覚障害学生への就学支援活動を通して、大学での障害学生支援のあり方に関して検討を行った。視覚障害学生の復学支援においては、面接による心理的ケア、学習指導、学事等との連携による支援、支援技術（スクリーンリーダー、拡大読書機、デイジー図書、ルーペ等）の紹介とトレーニング（各2～3時間×10回）、模擬授業、履修支援等を行った。聴覚障害学生支援においては、ノートテイカー養成、ノートテイカー派遣を実施し、13名のノートテイカーと1名の聴覚障害学生のヒアリングを通して評価した。

（3）カリキュラム化に向けた実験授業の準備

バリアフリー・ユニバーサルデザインに関するカリキュラム作成のための実験授業を日吉の商店街をフィールドに実施した。今年度は、アイマスク、車いす、発話支援機器（携帯型会話補助装置）で商店街を利用するという体験を通して、バリアフリー・ユニバーサルデザインについて共感的に理解する実験授業を18名の学生に対して実施し、カリキュラム化に必要な要件のチェックを行った。

（4）キャンパスの物理的バリアフリーに関する研究

大学は学生だけでなく、地域の人達が集い、活動する場でもある。そこで、キャンパスの安全・安心チェックを行った。その結果、校舎の建て替えに際して危険な場所が明らかになり、工事施工業者を含めたフィールドワークや話し合いを実施した。その結果、点字ブロックの敷設が必要な箇所が明らかになり、敷設方法について、障害当事者、専門家、工事依頼主、工事施工業者で議論を行った。また、障害当事者の合意形成過程に関して、分析を行った。

III．2007年度の研究計画

（1）発達障害のある学生の支援を通したこころのバリアフリーに関する研究

昨年同様、発達障害のある学生の理解と支援に関する連続公開セミナーを行い、教育・啓発活動を行う。また、公開セミナー講師や参加者との意見交換をしながら、支援体制のあり方について検討を行う。

（2）感覚障害のある学生の支援実践を通した文化・情報面でのバリアフリーに関する研究

昨年同様、中途失明した視覚障害学生の復学支援、ノートテイクが必要な聴覚障害学生への就学支援活動を通して、大学での障害学生支援のあり方に関して検討を行う。また、支援方法をビデオクリップ化し、学内で情報共有できるようにする。

（3）キャンパスの物理的バリアフリーに関する研究

障害のある学生や教職員が既存のキャンパスを利用することを前提にキャンパスの物理的バリアのチェックをワークショップ形式で実施する。チェックした結果は、ビデオクリップとしてまとめる計画である。

（4）カリキュラム化に向けた実験授業の実施

バリアフリー・ユニバーサルデザインに関するカリキュラムを検討するための実験授業を実施する。なお、キャンパスのバリアフリーチェック等の活動も実験授業として実施する。

【研究メンバー】
増田直衛（文）、中野泰志（経）、高山　緑（理工）
【研究協力者】
伊福部達（東京大学先端科学技術研究センター）、
中邑賢龍（東京大学先端科学技術研究センター）

（2）コミュニケーション・キャンパス構築

中山　純（経済学部）

I．研究の概要

外国語授業に関して教員と学生が学習目標と学習経過、学習記録を共有できるプラットフォームを設け、そこに集積するデータの解析結果を学習の指導や授業改善に利用していく環境の研究をしている。

情報の共有と透明化は、web上に構築されるポータルサイトを通して行う。ポータルサイトの中核には学習記録を管理するポートフォリオサイトを設ける。ポートフォリオでは、学習計画、授業内容、出席、成績など記録していく。2006年度と2007年度は、主にこのポートフォリオを構築していく。

Ⅱ．2006年度活動報告

2005年度に製作したサイトを検収し、実運用に向けて問題点を洗い出し、必要な改修やセキュリティー面での補強を行った。ポートフォリオのログインには慶應jpの共通認証制度を使うようにした。リファレンスサイトを除いては、実際にテスト運用が可能になったため、2007年度からの学生を入れたテスト運用が実施できるように環境の整備も行った。

2006年6月から2007年3月までに合計19回の検討会を実施して、主に学習計画の中のシラバス登録の方法、学習の進捗状況の提示の方法、必要な情報のタグ付けの規則などについて検討を重ねた。また実際の利用では使い勝手の良し悪しが利用度にも影響を与えるので、デザイン面でも改修を行った。

Ⅲ．2007年度の研究計画

サイト構築計画については、2006年度中に完成できなかった管理画面関係の構築と、卒業者・退学者データ退避機能など機能面での充実を図る。

また当初の目的である総合的な学習支援環境の提供を早く実現するために、語彙や文法に関するリファレンスサイトの内容の検討と設計、構築を実施していく。学習支援環境として教員と学習者を結ぶコンサルティングのライン、教員とドイツ語基本情報のDBを結ぶ教育情報のライン、学習者とDBを結ぶタスクのラインが必要であると考えているが、2007年度は主に教育情報のライン構築の研究を実施していく。

【研究メンバー】
中山　純（経）、朝吹亮二（法）、千田大介（経）

（3）テクノ・キャンパス構築

武山政直（経済学部）

Ⅰ．研究の概要

「テクノキャンパス構築」プロジェクトは、情報通信技術（ICT）に関連する研究・教育・ビジネス分野の大学、企業、組織が集積する秋葉原をフィールドとした各種の実践的なインターンシップ・プログラムの可能性について検討を行うことを目的として活動を開始した。ところが2006年度には、学習環境としての「テクノキャンパス」の意義を検討していくなかで、対象エリアや実践的学習法を特定せず、ICTをツールとしてさまざまな都市・地域をフィールドに、多様な可能性を追求すべく視野を拡張することとなった。そのようなプロジェクトの意義付けに基づき、キャンパス内外において、ICTを活用した新たなる学習環境の構築ならびに学習方法のトライアルを実施した。特に学生のキャンパスライフを向上させる地上波デジタル放送の活用、都市空間のクロスメディア型街歩きによる学習法の設計、地方都市フィールドワークのためのモバイル学習キットの開発を行い、それらの結果について評価した。

Ⅱ．2006年度活動報告

（1）テクノキャンパスのねらいの再検討

2005年度の活動について分析した結果、テクノキャンパスをキャンパス内外の様々な環境において実現していくこと、また職業体験としてのインターンシップとは異なる多様な実践的学習法を生み出していくことを目標として意義付けを行った。テクノという表現は、そもそもテクネーと呼ばれる技芸の知性を意味するものであり、単に大学キャンパスや授業への先端技術の導入に終わらず、技芸を重視した新たなる学習環境や学習法を設計していくことが重要であるとの認識に至った。

（2）キャンパスワンセグ放送による大学キャンパス生活とICTの活用

ワンセグ放送（携帯電話端末向け地上波デジタル放送）を大学キャンパス内に限定して提供する技術を用いて、学生生活向上のための番組制作と視聴者評価を行った。大学内やキャンパス周辺で起こっているさまざまな出来事を、学生の手作りの番組として伝えることで、学生どうしの情報共有やコミュニケーション、さらに学生生活の向上が図られる効果が確認された。

（3）クロスメディアによる街歩き学習法の開発：

街歩きをテーマとする書籍を出版する企業の協力を得て、書籍とWeb、モバイルメディアを連携させた街歩き実践の手法と教材のプロトタイプ設計を行った。クロスメディアによる街歩きは、身体を動かしながら都市の歴史や文化、建築、経済を学ぶ手法として有意義であり、またICTと身体知を融合するという意味において、さまざまな教育テーマに応用する可能性があることがわかった。

（4）高山市におけるフィールドワーク実施と汎用学習キットの開発

日吉の学生を主な対象として、「地方都市の現状を知る」ことをテーマにフィールドワークを実施した。高山市（岐阜県）を対象として、「バリアフリーとまちづくり」や「観光とまちづくり」を念頭においてに記録撮影を行った。また、その活動を通して気がついた点について高山市との担当者との意見交流を実際に行った。このことは学生に知的好奇心を刺激したようである。このフィールドワークを行うにあたり、各種一般向けIT機器を組み合わせて、記録撮影を支援する汎用学習キットを開発した。このキットの実用性を高めるべく、東京都内で3回の実習を行うことで各種機能のチェックを行った。このキットを高山市のフィールドワークで活用した結果、記録撮影が容易になり、今までより高度な記録を行うことができた。

III．2007年度の研究計画

2007年度はプロジェクトの最終年次であり、2005年度、2006年度を通じて試みた実践活動の評価を行うとともに、その結果を踏まえてテクノキャンパスとしての新たなる学習環境構築の構想を描くことを目標とする。そのプロセスの中で、さらなる検討の課題を明らかにし、必要に応じて学習環境構築のためのICT活用のトライアルも実施する。活動の柱として以下の3項目を設定する。

(1)テクネー（技芸）を重視する学習環境としてのテクノキャンパスのイメージづくり

(2)キャンパスの内と外、ならびにリアル空間とバーチャル空間を連携するICT活用の方策の検討

(3)都市や地域の生活空間をフィールドとした学習モデルの設計とそれを実現するICT活用方法の提示

【研究メンバー】

武山政直（経）、長田　進（経）

【研究協力者】

妹尾堅一郎（NPO法人産学連携推進機構理事長）

---

(4) インター・キャンパス構築

研究代表者　熊倉敬聡（理工学部）

I．研究の概要

地域、社会、大学が何を提供しあえるのか、また何を共有できるのかを探ることで、地域と大学、社会と大学が相互浸透しあい、やがて「内と外」が渾然一体となるような新たな関係性の実現、すなわち21世紀型インター・キャンパスを生み出すための総合的かつ多角的なプログラムの作成を目指す。インター・キャンパスのデザインやプロデュースのできる人材育成が期待できる実践型・「身体知」教育系のプログラムである。

実際には、三田商店街振興組合と協力し、三田キャンパス周辺に、上記コンセプトに基づいた新たな「学生街」の創出を目指す。大学と地域・社会とのインターラクションの結節点となるべきサイトを構築し、それを通して、さまざまな教育・研究プログラムを展開する。

II．2006年度活動報告

(1)「三田の家」

「三田の家」は、インター・キャンパスというコンセプトの具現であり、本プロジェクトの拠点である。4月～9月にかけて、取得した一軒家の改装をワークショップ形式で行う。9月30日には、仮のオープニングを行い、試験的運用を開始する。10月から3月にかけて、実験的授業、ワークショップ、講演会、三田商店街の各種イベントへの協力を行う。

(2)3月8日から11日にかけて、大阪・京都の文化・教育関係の施設・組織を訪れ、聞き取り調査を行い、「三田の家」の運営方法の参考にするとともに、それらの施設・組織との共同事業の可能性を探る。

III．2007年度の研究計画

「三田の家」は、半年の試験的運用期間を経て、ようやくこの4月に本格的オープニングを行った。今後従来の活動をさらに発展させるとともに、より商店街、地域住民との連携を強化していきたい。また、さらに「三田の家」の活動を広く知ってもらうべく、独自のウェブサイトの構築を含めたメディア環境を整えていきたい。さらには、「三田の家」の多様な活動を、何らかの形で編集しなおした出版物を作成したい。

【研究メンバー】

熊倉敬聡（理工）

【研究協力者】坂倉杏介（デジタルメディアコンテンツ統合研究機構）、岡原正幸（文）、手塚千鶴子（国際センター・日本語日本文化教育センター）、三田商店街振興組合

超表象デジタル化研究ユニット

ユニット代表者　境 一三（経済学部）

Ⅰ．研究の概要

本ユニットは、超表象デジタル化研究プロジェクトを構成するユニット間の連携を密にし、それらを有機的に統合して、プロジェクトの活動全体を円滑かつ積極的なものとするために、主に技術的な支援を行うことを目的とする。その活動は、統合研究ボードと緊密な連絡を取りながら行われている。

具体的には、本プロジェクトのためにhydiと呼ばれるハイパー・デジタル・インターフェイスを、Content Management System（CMS）の一種であるXOOPSと、Xerox社のDocument Archive Systemであるdocu-Shareを連携させることで実現した（http://hydi.keio.ac.jp）。

Ⅱ．2006年度活動報告

本ユニットは、2005年秋の活動開始以来、研究メンバーがそれぞれの分担作業を進めると共に、ほぼ週に一度のペースで会合を持ち、作業進捗状況の確認や批判的検討などを行っている。議論は対面で行われると同時に、hydiのフォーラムを用いても行われている。

以下にhydiのコンセプト並びにシステムデザインについて説明する。

（1）hydiのコンセプト

①超表象デジタル研究とhydi

旧来の大学は、それぞれの研究者が専門領域の知識を深めて行った結果、知の細分化と分断化が著しくなった。超表象デジタル研究は、こうした知のあり方を見直し、さまざまな知の領域における研究をそれぞれ分断されたものとして捉えるのではなく、それらを超領域的に統合するメタモデルを構築することにより、知の生産と継承の場としてのキャンパスづくりに貢献しようとするものである。

②hydiの目的

そうしたプロセスの具現化のために開発を進めているのがhydiである。hydiは、それぞれの研究プロジェクトの共同作業を円滑化するコミュニケーション・システムである。研究メンバーはさまざまなフォーマットの文書・音声・画像ファイルを共有・交換し、共同で加工して研究成果の作成を行うが、hydiはそのプロセスをサポートする。

すなわち、共同研究が分断された知の並列として存在するのではなく、それぞれの研究のもつ意味、すなわちその「表象」を「超」領域的にデジタル化することにより、知の共有と研究の超領域的統括を有機的に機能させようとするものである。

③hydiの機能と特徴

hydiは共同研究のコミュニケーション・システムとして開発されている。カレンダー、ニュース、連絡ボード、文書交換システム、音声・画像ストリーミング・システムからなり、サーバー・コンピュータ上におかれた一連のプログラムで、インターネットを通じて個々のPCから情報にアクセスすることができる。

これらの技術の多くは既存のものであるが、これらを統合して、大学の共同研究におけるさまざまなプロセスをひとつのシステムに収めるというものは、現在のところまだ存在していない。つまり、hydiは研究の過程でできるさまざまな電子媒体を、ひとつのバーチャルな研究スペースに置き、研究の開始から実施・完成公開までのプロセスを一元化したシステムのなかで進めていけるようにするインターフェースである。

（2）システム構成と機能

ここではhydiシステムを構成する機能群を示す。

①ドキュメント管理

・マイクロソフトオフィス製品（Word, Excel, PowerPoint）、PDF、画像（JPEG, GIF, BMP）、映像（MPEG, WMV, AVI）など、多種多様なファイルフォーマットをサポートする

・サーバー上に格納されたコンテンツに対して、アクセスコントロールを実現している。システム利用者はサーバー上のコンテンツのアクセス権を設定することによって、そのコンテンツの公開対象者を自由に設定できる。

・コンテンツのファイル名だけでなく、PDFやWord文書、パワーポイントファイル中のキーワードに対する検索をサポートする。

・コンテンツの閲覧画面に、そのコンテンツのサマリー（ドキュメントの冒頭部分、あるいは、要約）を提示することによって、ドキュメント閲覧の際の検索性を向上させる。

・コンテンツの編集過程を記録するバージョン管理機能を有する。以前のコンテンツの状態を参照することを可能にすることによって、グループ内でコンテンツを編集していく作業をサポートする。

②フォーラム
・システム利用者間におけるディスカッションやコミュニケーションを行う機能を提供する。そこではHTMLタグを利用することによる表現力の高いコミュニケーションをサポートする。
・フォーラムに新規の投稿があった際、システム利用者はそれを通知するメールを受け取ることができる。それは利用者が特定のフォーラムに対して、書き込みがあれば通知されるように事前に設定することによって可能となる。
③ニュース
・ニュース機能はシステム利用者がシステムのトップページに情報を掲載することをサポートする。この機能によって、塾内外に対して広く情報を発信することが容易となる。
④カレンダー
・ミーティングやイベントに関するスケジュール情報を共有することが可能となる。
・フォーラムと同様に、カレンダーに新たな情報が追加された際に、その通知をメールで受け取ることが可能である。
⑤コンテンツ検索
・キーワードによるコンテンツ検索機能によって、システム利用者がシステム内に格納されたコンテンツを検索することをサポートする。

III. 今後の展望

これまでの基盤整備の進展を受け、今後はプロジェクト全体でのhydiシステム運用を最重要課題とする。そのための支援活動を中心に据える。

また、このようなシステム運用を定着させる活動と並行して、hydiシステムのマルチメディア・マルチリンガル化を進める。また周辺の課題として検索エンジンを整備する。

【研究メンバー】
境　一三（経）、佐藤　望（商）、倉舘健一（外国語教育研究センター）、久納鏡子（教養研究センター）、
【研究協力者】（学生）森　薫（政策・メディア研究科）、佐々木朋美（総合政策学部）、米川雅士（理工学研究科）、Tarum Kumar Sheel（理工学研究科）

フレーム意味論によるオンライン日本語語彙情報資源の構築

研究代表者　鈴木亮子（経済学部）

Ⅰ．研究概要

認知フレームの概念と自然言語処理的手法を用いて、詳細な意味情報をコーパスデータに付与した日本語基本語彙に関する情報資源「日本語フレームネット」の理論的・方法論的モデルを構築する。

Ⅱ．2006年度の活動報告

本年度は、「自律移動」事象に関する和語動詞を中心に分析を行い、オンライン語彙情報資源上のコーパス例文にツールを使って意味タグ付けを行った。また、「危険」と言う概念についても、分析、意味タグ付け、日英比較対照を行った。

英語フレームネット・プロジェクトとの共同研究も引き続き行った。

具体的には、以下の活動が挙げられる。

●2006年8月31日（木）「フレームネット・テュートリアル」（於：東京大学駒場キャンパス）（講師：英語フレームネット研究代表者チャールズ・フィルモア氏(カリフォルニア大学バークレー校名誉教授、International Computer Science Institute 以下ICSI)、同プロジェクトマネージャーのコリン・ベーカー氏(ICSI)）の準備、ならびに参加。

●2006年9月1日（金）から3日（日）第4回国際構文理論学会（於：東京大学駒場キャンパス）で研究成果発表（下記III参照）。

●2006年9月4日（月）フレームネット・日本語フレームネット合同会議（於：東京大学駒場キャンパス）。参加者：本研究メンバー、チャールズ・フィルモア氏、コリン・ベーカー氏、英語フレームネット主管言語分析者のマイケル・エルスワース氏（ICSI）、長谷川葉子氏（カリフォルニア大学バークレー校准教授）、佐藤弘明氏（専修大学教授）、英語フレームネットアノテータのラッセル・リーゴールドマン氏（カリフォルニア大学バークレー校言語学科博士課程）。

●2006年9月5日（火）小泉基金により、マイケル・エルスワース氏の講演「結合価の階層：フレームネットにおける意味情報の形式化」を開催（於：日吉来往舎中会議室）。

Ⅲ．研究成果と課題

〈研究成果発表〉

●長谷川葉子、小原京子.「Charles J. Fillmore 教授に聞く」『英語青年』、研究社、152巻6号、pp. 354-359、2006.

●小原京子.「フレーム意味論と日本語フレームネット」『日本語学』、明治書院、25巻6号、pp. 40-52、2006.

● Ohara, Kyoko Hirose, Seiko Fujii, Toshio Ohori, Ryoko Suzuki, Hiroaki Saito, Shun Ishizaki. "Frame-based Contrastive Lexical Semantics and Japanese FrameNet: The case of RISK and *kakeru*." Proceedings of the Fourth International Conference on Construction Grammar, 2006.

● Hasegawa, Yoko, Kyoko Ohara, Russell Lee-goldman, Charles J. Fillmore. "Frame Interegtion, Head Switching, and Translation: RISK in English and Japanese." Proceedings of the Fourth International Conference on Construction Grammar, 2006.

● Ellsworth, Michael, Kyoko Ohara, Carlos Subirats, Thomas Schmidt. "Frame-semantic analysis of motion scenarios in English, German, Spanish, and Japanese." Proceedings of the Fourth International Conference on Construction Grammar, 2006.

〈課題〉

今後は他のさまざまな意味分野についても日本語フレームネットのモデル構築が行えるようアノテータを養成し、アノテーション作業の迅速化を図る。

【研究メンバー】

鈴木亮子（経）、斎藤博昭（理工）、石崎　俊（環境情報）、大堀壽夫（東京大学大学院総合文化助教授）、藤井聖子（東京大学大学院総合文化助教授）、小原京子（理工）

総合的な視野から見た環境問題解析と環境教育の試み

研究代表者　秋山豊子（法学部）

Ⅰ．研究概要

本塾の学生には環境問題に非常に高い意識や関心を持つ学生が多い。しかしながら、環境問題に関連する知識が総合的理解力を必要とすることから、問題の解析が困難な場合もある。本研究は、法学・経済学・物理学・化学・生物学の各分野の有志の教員が2001年より行ってきた研究会を公開し、一方で、その要旨を分かりやすく塾内外に発信・公開し、総合的な視野で環境問題の理解を図ることを目的としている。それを通して、環境問題にはバランスの取れた多様な視点が必要であることを示してゆく。これまでの活動と研究会の発表要旨は、大平によりWebに記載されつつある。扱ったテーマは、紫外線の影響、オゾン層の破壊、環境支援の経済的な問題、森林問題、生体防御と金属、土壌汚染、水質汚染、放射能汚染、台風や地震の問題、温暖化問題、アスベスト問題、電磁波、タバコの問題など多様である。それらを各人の環境教育に役立ててきた。学生からもこのような学際的な形で環境問題を学ぶ機会が望まれており、将来的に授業として開講し教育に還元してゆきたい。

Ⅱ．2006年度の活動報告

2006年度の研究会は以下のように行った。当日はレジュメ、あるいはパソコンからのパワーポイントの映写で発表と議論がなされた。

5月22日　発表者　大平「アチェの津波被害」

7月26日　全員発表（秋山、大平、金谷、小瀬村、林、六車）「人口問題」

10月27日　全員　研究会の方向性について討論、特に公開について。

12月1日　発表者　大平・六車「生物資源を維持・利用・管理するための制度；由比のプール制」（学生の参加有）

2007年2月27日　発表者　六車「豊島事件と廃棄物処理法改正」

その他、これまでの研究会のレジュメを整理し、順次、ホームページに記載することを行った。この作業はおよそ週に1～2度、研究室を使用して行った。これまでの有志教員のみによる研究会を第一段階として、学生や興味のある教員に呼びかけを行い限定的な公開を行った。

Ⅲ．研究成果と課題

2006年度は、学生や興味のある教員に広報し、議論や解析結果の効果を広げてきた。一方、これまでの研究会のレジュメを整理し、順次、ホームページに記録を掲載してきた。その他の研究成果は以下の通り。

①六車　明「環境と経済－基本法を創るものと基本法が創るもの－」慶應法学第7号2007年3月平良木登規男教授退職記念号563-609頁、編集兼発行人　慶應義塾大学大学院法務研究科　平良木登規男、制作・発売　慶應義塾大学出版会

②六車　明「多数者による取消訴訟と訴額」小早川光郎・宇賀克也・交告尚史編『行政判例百選Ⅱ第5版』別冊ジュリスト182号、平成18年6月20日号、有斐閣、440-441頁（内容は、原告が守ろうとしたものは何か、という環境法の本質に関係するもの）

③大平　哲　環境制約下の経済成長：理論分析(三田学会雑誌1998年)

④大平　哲　国際協力銀行からの受託研究「中国黒龍江省三江平原商品穀物基地計画事後評価」で経済開発と環境保護とのバランスについて調査、2006年

Ⅳ．次年度への展望

この研究班の活動は、2001年に有志の教員の研究会の形で始まり、すでに6年目となっている。その間、構成員は班員として記載した以外の参加者も含め8～9名ほどで、およそ2カ月に1回位の研究会を続けている。これまでの研究会の発表要旨は、大平によりWebに記載されつつある。これまで扱ったテーマは、Ⅰに記載したような多様な問題である。ホームページは現在、班員のみが閲覧できる形になっているが、今年度以降、さらに発表内容を充実させてまとめ、一般公開してゆく予定である。2007年度は、これまでどおり約2カ月に1度の研究会を開催し、興味のある学生・教員に参加を呼びかけ、最終的には公開講座としてゆく。また、テーマにより、外部から講師を呼ぶことも検討する。次年度は、環境問題を取り扱うオムニバス方式の授業の開講準備、水質・大気・土壌汚染の現地調査と、それらの問題の解析・検討の実行などを試みる。

【研究メンバー】

秋山豊子（法）、大平　哲（経）、金谷信宏（法）、小瀬村誠治（法）、林　秀光（法）、六車　明（法務研）（順不同）

理工学部・経済学部における数学教材のデジタル化

研究代表者　戸瀬信之（経済学部）

Ⅰ．研究概要

情報化が進んだ現在、教員から学生への資料提供が容易になったはずである。ところが、大学における数学教育に関しては、さまざまなネットワークリソースの蓄積、あるいは蓄積の方法の改善が進んでいないために、状況はあまり改善されていない。この問題の多少の糸口を見つけるのがこのプロジェクトの目的である。具体的には、義塾内の数学教育のリソースの電子化を組織的に展開することを考える。そのために、理工学部や経済学部におけるいくつかの講義のシラバス分析のもとに、講義内容、補助教材、計算機プログラム（特にMathematica用、統計言語R）の提供を行った。また、義塾内の電子化された数学リソースをネットワーク上で公開する方法、あるいはセミナーの共同作業用のプラットホームの準備および実験を行った。特に、講義ビデオのインターネット上での公開のためのサーバーの構築・運用を行った。以上に加えて、インターネット上で数式を含んだ文書を公開するために、マークアップ言語MathMLを利用する研究などを行い、ディスカッションプラットホーム上で数式を用いるためのインターフェースの運用をも行った。

Ⅱ．2006年度の研究の概要

（1）コースウェアの電子化：「微分積分入門」（経済学部前期）、「微分積分」（経済学部後期）の1年間のコースウェアを一式電子化してインターネット上で公開した。電子化して公開したリソースは、各講義の概要、小テストの問題とその解答、スライドである。このことに加えて、後期の10回分の講義のビデオを撮影して、RealVideoの形式でインターネット上で公開した。

（2）理工系および統計学の補助プログラムの提供：数式処理言語Mathematicaと統計言語Rを用いた数学用の補助プログラムの提供の準備を行った（数学の解説を加えて、公開する予定である）。

（3）ゼミ用のディスカッションプラットホームの提供：ゼミナールなどにおいて、レポート作成などの共同作業やディスカッションを行うプラットホームを実験的に提供した。経済学部の伊藤幹夫セミナーで、毎回のゼミの報告の補助として効率的に用いることを行った。

（4）インターネット上のビデオサーバーの構築：RealVideoの形式で、講義のビデオをインターネット上で公開することを行った。自宅や大学で視聴するために最適なエンコードについて、微妙な調整に関して実験を行った。

（5）インターネット上での数式表現の実装：XML形式による数式mark-up言語であるMathMLを用いて、数式を含む教材をインターネット上で公開するさまざまなノウハウの蓄積を行った。実際には、（1）の「微分積分入門」や「微分積分」の小テスト問題や講義概要に用いた。また、ゼミ用のプラットホームには、tex形式の数式入力をすれば自動的に画像ファイルの数式を生成してくれるインターフェースを提供して、数式を用いた共同作業を容易にする試みを行った。

Ⅲ．研究成果と課題

研究成果は全て電子化してインターネット上で公開してある（ただし、追加説明が必要なリソースについては、公開準備をしているところである）。今後の課題は、リソースを電子化して公開するノウハウを蓄積したので、電子化するリソースをさらに増やすことにある。また、e-learning教材を公開するために、さらなるシラバス分析を行う必要がある。このことが重要なのは、ネットワーク上の教材としてリンク、ハイパーリンク機能を縦横無尽に使えるからである。

Ⅳ．次年度への展望

リソースの蓄積を継続的に行う。

【研究メンバー】

戸瀬信之（経）、前田吉昭（理工）、厚地　淳（経）、小木曽啓示（経）、伊藤幹夫（経）、森吉仁志（理工）

慶應義塾大学 日吉キャンパス公開講座
「自然と科学と人間」
受講者アンケート結果

●基礎情報

期間：2006年9月30日から12月2日までの毎週土曜日
- 3時限目（13時00分～14時30分）
- 4時限目（14時45分～16時15分）

回数：全10回（内6回以上の出席者に対し修了証を授与）
場所：第4校舎B棟J14番教室
対象：社会人他
応募者数：264名
受講者数：242名／定員300名
修了者数：207名（約85.5%）
全回出席者数：55名（約22.7%）
アンケート回収枚数：171枚（約70%）

●年齢内訳

10、20代	3%
30代	1%
40代	7%
50代	18%
60代	42%
70代以上	29%

＊受講者全体の平均年齢は61歳であった。60代、70代以上のすでに退職されている方々が最も多い。

●職業内訳

無職	87名
専業主婦	38名
勤め人	34名
パート	4名
自営業	4名
その他	11名

＊職業の内訳では無職の方、退職された方が最も多い。専業主婦、勤め人の割合が昨年に比べ伸びている。

●会場までの所要時間

1時間以内	34%
30分以内	30%
1時間以上	20%
15分以内	16%

＊受講者は「横浜市民講座」からの継続者およびリピーターが多いため、横浜市内の方が多く、30分～1時間以内の方が多い。

●今回の講座を何で知りましたか？（複数回答可）

大学からのお知らせ	140
大学Webページ	26
知人より	16
新聞	2
駅PRボックス	1
生涯学習支援センター、生涯学習相談コーナー	1
地区センター	1
生涯学習情報システムPLANETかながわ	0
パンフレット	2
その他	3

＊大学からのお知らせをもとにする方が圧倒的に多い。また、夫婦や友人・知人同士で誘い合うケースも見受けられた。

●受講された動機、目的は何ですか。（複数回答可）

教養を高めるため	115
趣味・楽しみのため	98
テーマに魅力を感じたため	50
仕事や資格取得に生かすため	4
その他	2

＊昨年同様、「教養を高めるため」が最も多い。これは、受講生の多くが60歳以上であることから、知的交流・刺激を求めた受講生が多いということが推測できる。

●講座の内容はいかがでしたか。

満足	32%
やや満足	53%
どちらでもない	9%
やや不満足	4%
不満足	2%

●今後どのような講座を希望しますか？（2つまで選択可）

文学、歴史	96
社会問題	67
法律、経済	47
芸術、趣味	41
語学、国際交流	26
健康	22
生物、ゲノム	30
情報、メディア	20
その他	2

教養研究センター
規程

第1条　慶應義塾大学（以下「大学」という。）に、慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts。以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第2条　センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

（事業）

第3条　センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1　教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動

2　教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援

3　教養研究活動への助成および支援

4　教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信

5　その他センターの目的達成のために必要な事業

（組織）

第4条　①　センターに次の教職員を置く。

1　所長

2　副所長　若干名

3　所員　若干名

4　研究員　若干名

5　事務長

6　職員　若干名

②　所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

③　副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

④　所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

⑤　研究員は、特別研究教員（有期）、研究員（有期）または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥　国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑦　事務長は、センターの事務を統括する。

⑧　職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

（運営委員会）

第5条　①　センターに運営委員会を置く。

②　運営委員会は、次の者をもって構成する。

1　所長

2　副所長

3　事務長

4　大学各学部長

5　大学各学部日吉主任

6　日吉研究室運営委員長

7　日吉メディアセンター所長

8　日吉ITC所長

9　日吉キャンパス事務長

10　その他所長が必要と認めた者

③　委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④　運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤　運営委員会は、次の事項を審議する。

1　センター運営の基本方針に関する事項

2　センターの事業計画に関する事項

3　研究プログラムの企画・運営等に関する事項

4　人事に関する事項

5　予算・決算に関する事項

6　コーディネート・オフィスに対する付託事項

7　その他必要と認める事項

（コーディネート・オフィス）

第6条　①　センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するためにコーディネート・オフィスを置く。

②　コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。

（小委員会）

第7条　運営委員会は、必要に応じて小委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

（教職員の任免）

第8条　①　センターの教職員等の任免は、次の各号による。

1　所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。

5　副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。

3　特別研究教員（有期）および研究員（有期）については、「任免規程（就）（昭和27年3月31日制定）」の

定めるところによる。
4　訪問研究者については、「塾外学者に対する職位規程（昭和51年8月27日制定）」の定めるところによる。
5　事務長および職員については、「任免規程（就）（昭和27年3月31日制定）」の定めるところによる。
6　コーディネーターは、所員および職員の中から所長が委嘱する。
②　所長・副所長の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。
③　所員の任期は2年とし、重任は妨げない。
④　兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。
（研究プログラム）
第9条　①　センターに次の研究プログラムを置く。
1　基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究で、運営委員会が審議、採択したもの。
2　一般研究：個人研究ならびに共同研究で、センターが必要と認めたもの。
3　特定研究：運営委員会の議を経て、センターが企画、立案、募集したもの。
②　研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。
（契約）
第10条　①　外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。
②　学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。
（経理）
第11条　①　センターの経理は、「慶應義塾経理規程（昭和46年2月15日制定）」の定めるところによる。
②　センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。
③　外部資金の取扱い等については、研究支援センターの定めるところによる。
（規程の改廃）
第12条　この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附　則
①　この規程は、平成14年7月1日から施行する。
②　この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。
附　則（平成17年6月3日）
この規程は、平成17年6月3日から施行する。
附　則（平成18年5月9日）
この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

教養研究センター
運営委員会委員（敬称略）

任期： 2005年10月1日～2007年9月30日　第3期　　（2006年度在籍者）

教養研究センター	担当常任理事	西村　太良	
	所長	横山　千晶	
	副所長	近藤　明彦	2006年9月まで
	副所長	岩波　敦子	2006年9月まで
	副所長	萩原　眞一	2006年10月から
	副所長	中島　陽子	2006年10月から
	副所長	佐藤　望	2006年4月から
	事務長	吉川　智江	
文学部	学部長	関場　武	
経済学部	学部長	塩澤　修平	
法学部	学部長	小此木　政夫	
商学部	学部長	桜本　光	
医学部	学部長	池田　康夫	
理工学部	学部長	稲崎　一郎	
総合政策学部	学部長	小島　朋之	
環境情報学部	学部長	冨田　勝	
看護医療学部	学部長	佐藤　蓉子	
文学部	日吉主任	坂上　貴之	
経済学部	日吉主任	羽田　功	
法学部	日吉主任	朝吹　亮二	
商学部	日吉主任	橋本　順一	
医学部	日吉主任	古野　泰二	
理工学部	日吉主任	大谷　弘道	
日吉研究室運営委員会	委員長	小潟　昭夫	
教養研究センター			
基盤研究	座長	伊藤　行雄	
	（慶應義塾大学の教育カリキュラム研究）		
	座長	横山　千晶	
	（身体知プロジェクト）		
特定研究	研究代表	羽田　功	
日吉行事企画委員会	委員長	小菅　隼人	
極東証券寄附講座運営委員会	委員長	武藤　浩史	
日吉キャンパス公開講座運営委員会	委員長	小潟　昭夫	
日吉メディアセンター	所長	伊藤　行雄	
日吉ＩＴＣ	所長	中山　純	
日吉キャンパス	事務長	彦久保　勝良	
外国語教育研究センター	所長	金田一　真澄	
日吉学事センター	部長	栗谷　文治	
日吉メディアセンター	事務長	石黒　敦子	2006年10月まで
	事務長	富山　優一	2006年11月から
日吉事務運営サービス	課長	酒井　秀明	

教養研究センター
コーディネート・オフィス（敬称略）

研究企画ボード
・責任者：横山千晶（所長・法）
・コーディネーター：坂本　光（文）、中島陽子（文、2006.10.1 **〜）、石井　明（経）、小潟昭夫（経）、境　一三（経）、羽田　功（経）、太田昭子（法、**2006.09.30 **まで）、武藤浩史（法）、佐藤　望（商）、種村和史（商）、橋本順一（商）、鈴木伸一（医）、岩波敦子（理工）、金田一真澄（理工）、熊倉敬聡（理工）、小菅隼人（理工）、萩原眞一（理工、**2006.10.1 **〜）、近藤明彦（体研）、彦久保勝良（キャンパス事務長）、吉川智江（教養研究セ）**

調査・研究セクション
・責任者：近藤明彦（副所長・体研、2006.9.30 **まで）、萩原眞一（副所長・理工、**2006.10.1 **〜）**
・コーディネーター：白崎容子（文）、中島陽子（文）、境一三（経）、鈴村直樹（経）、根岸宗一郎（経）、Ballhatchet, Helen Julia**（経）、八嶋由香利（経）、井上逸兵（法）、本谷裕子（法）、安田　淳（法）、瀧本佳容子（商）、加藤大仁（体研）、近藤明彦（体研、**2006.10.1 **〜）、高橋純子（教養研究セ）**

交流・連携セクション
・責任者：佐藤　望（副所長・商、2006.9.30 **まで）、中島陽子（副所長・文、**2006.10.1 **〜）**
・コーディネーター：納富信留（文）、石井　明（経）、小潟昭夫（経）、林田　愛（2006.10.1 **〜）、松原彰子（経）、牛島利明（商）、佐藤　望（商、**2006.10.1 **〜）、橋本順一（商）、石井達朗（理工）、熊倉敬聡（理工）、近藤幸夫（理工）、野口和行（体研）、園田陽子（高校）、徳竹成之（高校）、野津将史（高校）、今井英喜（普通部）、甲賀崇史（教養研究セ）**

広報・発信セクション
・責任者：岩波敦子（副所長・理工、2006.9.30 **まで）、佐藤　望（副所長・商、**2006.10.1 **〜）**
・コーディネーター：柏崎千佳子（経）、大出　敦（法、2006.9.30 **まで）、**Raeside, James M**（法）、佐藤　望（商、**2006.9.30 **まで）、鈴木伸一（医）、森　泉（理工）、横山由広（理工、**2006.9.30 **まで）、村松　憲（体研）、高橋純子（教養研究セ）**

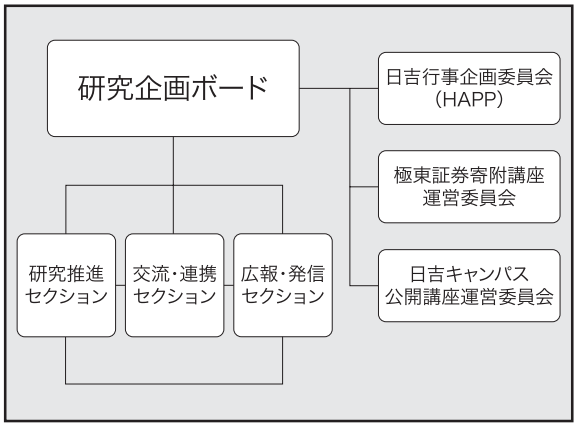
教養研究センター事務局
吉川智江（事務長）、甲賀崇司、宮坂敦子

日吉行事企画委員会（HAPP）
委員長：小菅隼人（理工）
委員：坂本　光（文）、石井　明（経）、小潟昭夫（経）、羽田　功（経）、下村　裕（法）、佐藤　望（商）、竹内美佳子（商）、森吉直子（商）、小宮　繁（理工）、石手　靖（体研）、河邊博史（保セ）、彦久保勝良（キャンパス事務長）、酒井秀明（運営サ）、土田平和（運営サ）、北村悦子（運営サ）、長田信夫（学事セ）、藤田忠夫（学総セ、2006.9.30 **まで）、栗谷文治（学総セ、**2006.10.1 **〜）、上野美代子（学総セ）、石黒敦子（日吉メディアセ、**2006.9.30 **まで）、富山優一（日吉メディアセ、**2006.10.1 **〜）、石田恭子（日吉メディアセ）、日水邦明（研究室）、林尚之（外国語教育研究セ）**

極東証券寄附講座運営委員会
委員長：武藤浩史（法）
委員：中島陽子（文）、竹内良雄（経）、横山千晶（法）、石原あえか（商）、鈴木伸一（医）
熊倉敬聡（理工）、吉田泰将（体研）、広瀬　寛（保セ）、吉川智江（教養研究セ）、小磯勝人（大学出版会）

日吉キャンパス公開講座運営委員会
委員長：小潟昭夫（経）委員：石井　明（経）、石井康史（経）、伊藤行雄（経）、井上逸兵（法）、小瀬村誠治（法）、高桑和巳（理工）、近藤明彦（体研）、松田雅之（体研）

コーディネート・オフィス組織図（2004.10.1 〜）



教養研究センター
所員・研究員（敬称略）

○大学教養研究センター所長・副所長・事務長
任期：2004年10月1日～2006年9月30日
所長：横山千晶（法学部教授）
副所長：佐藤望（商学部助教授、2006年4月1日～）、岩波敦子（理工学部助教授、2006年9月30日まで）、近藤明彦（体育研究所教授、2006年9月30日まで）
教養研究センター事務長：吉川智江

任期：2006年10月1日～2008年9月30日
所長：横山千晶（法学部教授）
副所長：中島陽子（文学部教授）、佐藤　望（商学部助教授）、萩原眞一（理工学部教授）
教養研究センター事務長：吉川智江

○大学教養研究センター所員
専任教員　165名
任期：2005年4月1日～2007年3月31日

文学部：足立健次(助教授)、安藤寿康（教授）、大場茂（教授）、片木智年（助教授）、金子洋之（助教授）、倉田敬子（教授）、斎藤太郎（教授）、坂上貴之（教授）坂田幸子（教授）、坂本　光（助教授）、櫻井準也（助教授）、白崎容子（教授）、高橋宣也（助教授）、高山　博（教授）、中島陽子（教授）、中村優治（教授）、西村太郎（教授）、納富信留（助教授）、長谷山彰（教授）、辺見葉子（助教授）、増田直衛（教授）、吉田恭子（助手）

経済学部：青木健一郎（教授）、厚地　淳(教授)、石井明（助教授）、石井康史（助教授）、池田　薫（教授）、伊藤行雄（教授）、Ainge, Michael W.（助教授）、小潟昭夫（教授）、長田　進（助教授）、柏崎千佳子（助教授）、桂田昌紀(教授)、Gaboriaud, Marie（教授）、岸　由二（教授）、工藤多香子（助教授）、Knaup, Hans Joachim（教授）、後平　隆（教授）、近藤光雄（教授）、境　一三（教授）、佐々木由美（助教授）、志村明彦（助教授）、杉浦章介（教授）、杉岡洋子（教授）、鈴木晃仁（教授）、鈴木五郎（教授）、鈴木亮子（助教授）、鈴村直樹（教授）、武山政直（助教授）、千田大介（助教授）、土屋博政（教授）、友部謙一（教授）、中山　純（教授）、永井容子（助教授）、長沖暁子（助教授）、長堀祐造（教授）、西尾修（教授）、西岡久美子（教授）、Notter, David M.（助教授）、根岸宗一郎（専任講師）、羽田　功（教授）、Batty, Roger M.（助教授）、光　道隆（教授）、福山欣司（助教授）、不破有理（教授）、星　浩司（助教授）、Ballhatchet, Helen Julia（教授）、松岡和美（教授）、松原彰子（教授）、宮崎直哉（助教授）、八嶋由香利（助教授）

法学部：秋山豊子（教授）、朝吹亮二（教授）、岩谷十郎（教授）、太田昭子（教授）、大出　敦（専任講師）、大久保教宏（助教授）、小野裕剛（専任講師）、木俣　章（専任講師）、久我俊二（教授）、小瀬村誠治(教授)、小屋逸樹（教授）、迫村純男（教授）、下村　裕（教授）、志村正（専任講師）、鈴木恒男（教授）、鈴木　透（教授）、辻幸夫（教授）、常山菜穂子（助教授）、Henck, Nicholas J.（訪問助教授）、本谷裕子（専任講師）、McLynn, Neil B．（教授）、武藤浩史（教授）、安田　淳（教授）、Raeside, James M．（教授）、横山千晶（教授）

商学部：浅川順子（教授）、朝比奈緑（助教授）、牛島利明（助教授）、小宮英敏（教授）、佐藤　望（助教授）、白旗　優（助教授）、田上竜也（助教授）、瀧本佳容子（助教授）、竹内美佳子（助教授）、種村和史（教授）、橋本順一（教授）、長谷川百利子（助教授）、英　知明（教授）、福澤利彦（助教授）、森吉直子（助教授）、安田公美（専任講師）、湯川　武（教授）、横山和加子（教授）

医学部：大石　毅（助手）、小林常利（教授）、小町谷尚子（助教授）、鈴木伸一（専任講師）、鈴木由紀（専任講師）、中澤英夫（助手）、三井隆久（助教授）

理工学部：石井達朗（教授）、岩波敦子（助教授）、大谷弘道（教授）、岡浩太郎（教授）、小原京子（助教授）亀谷幸生（助教授）、熊倉敬聡（教授）、小菅隼人（教授）、小宮　繁（専任講師）、近藤幸夫（助教授）、斎藤博昭（助教授）、坂川博宣（助手）、下村　俊（教授）、田中孝明（助手）、田村要造（助教授）、仲田　均（教授）、萩原眞一（教授）、広本勝也（教授）、北條彰宏（助教授）、前島　信（教授）、前田吉昭（教授）、森　泉（助教授）、森吉仁志（助教授）、横山由広（助教授）

総合政策学部：太田達也（専任講師）

環境情報学部：石崎　俊（教授）

保健管理センター：大野　裕（教授）、河辺博史（教授）、西村由貴（専任講師）

体育研究所：石手　靖（助教授）、加藤大仁（助教授）、

近藤明彦（教授）、野口和行（専任講師）、松田雅之（助教授）、村松　憲（専任講師）、村山光義（助教授）、吉田泰将（助教授）

外国語教育研究センター：倉舘健一（助手）

高等学校：大西　章（教諭）、園田陽子（教諭）、徳竹成之（教諭）、野津将史（教諭）

普通部：今井英喜（教諭）、太田　弘（教諭）

専任教員　30名
任期：2006年4月1日～2008年3月31日

法科大学院：六車　明（教授）

経済学部：新井拓児（助教授）、伊藤幹夫（助教授）、大平　哲（助教授）、小木曽啓示（教授）、戸瀬信之（教授）、中野泰志（教授）

法学部：井上逸兵（教授）、Narahashi-Henry, Nathalie（専任講師）、宮下理恵子（助教授）

商学部：石原あえか（助教授）、Cominetti Philippe（専任講師）、深谷太香子（専任講師）、渡部睦夫（教授）

理工学部：石井一平（助教授）、石川史郎（助教授）、太田克弘（教授）、小田芳彰（専任講師）、金田一真澄（教授）、栗原将人（教授）、高桑和巳（専任講師）、高山正宏（助手）、谷　温之（教授）、田村明久（教授）、宮崎琢也（助教授）

国際センター：手塚千鶴子（助教授）

志木高等学校：速水淳子（教諭）

湘南藤沢中等部・高等部：中平仁孝（教諭）

普通部：鈴木淑博（教諭）

幼稚舎：鈴木秀樹（教諭）

専任教員　5名
任期：2006年4月1日～2007年3月31日

法学部：沓村憲樹（助手）、佐藤元状（専任講師）、萱嶋泰成（助手）

理工学部：荒金直人（専任講師）、高山　緑（助教授）

○大学教養研究センター研究員
専任教員　1名
任期：2006年5月1日～2007年3月31日
久納鏡子（文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」）（非常勤）

○大学教養研究センター兼任研究員
塾外研究者等　11名
任期：2006年4月1日～2007年3月31日

磯崎敦仁（慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士3年）
坂倉杏介（デジタルメディアコンテンツ統合研究機構）
臼杵　陽（日本女子大学文学部教授）
内田伸哉（慶應義塾大学大学院理工学研究科修士課程2年）
内海雄介（早稲田大学大学院国際情報通信研究科）
大堀壽夫（東京大学大学院総合文化助教授）
佐谷眞木人（恵泉女学園大学人文学部日本文化学科助教授）
妹尾堅一郎（NPO法人産学連携推進機構理事長）
ヒョン・G・リュー（リード大学）
藤井聖子（東京大学大学院総合文化助教授）
村井丈美（アートセンター訪問所員、2006年9月まで）

2006 年度の主な活動記録

Date		Contents
4		極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅠ」開講（春学期）
	7 日	センター全体会議／新任教員へのセンターガイダンス
	12 日	日吉「予算管理部門内調整費」による「新しい教養授業の支援」事業公募（第 1 次）（5 月 15 日採択）
	13 日	極東証券寄附講座「生命の教養学―生命を見る・観る・診る」（2006 年 7 月 13 日まで 13 回）
	19 日	塾長講演会「塾長と日吉で語ろう！」
6	3 日	日吉「予算管理部門内調整費」による「新しい教養授業の支援」事業公募（第 2 次）（7 月 20 日採択）
	9 日	極東証券寄附講座「生命の教養学〈特別公開講座〉“生きている”を見つめ“生きる”を考える―生命誌の視点から」
	23 日	第 1 回「軽度発達障害の世界を知る―思春期・青年期の生きにくさへの理解と援助に向けて―」
7	7 日	第 2 回「軽度発達障害の世界を知る―思春期・青年期の生きにくさへの理解と援助に向けて―」
	20 日	公開セミナー「ミシェル・フーコー使用法」
	26 日	〈講演会〉「Open Secrets　公然の秘密」
8	3 ～ 31 日	極東証券寄附講座「生命の教養学〈ギャラリー展〉”見る・観る・診る”の生命誌」
9		極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅡ」開講（秋学期）
	19 日	センター運営委員会
	29 日	〈実験授業〉「体をひらく、心をひらく」（2007 年 1 月 12 日まで 8 回）
	30 日	日吉キャンパス公開講座「自然と科学と人間」（12 月 2 日まで 10 回）
10	17 ～ 30 日	クリスト＆ジャンヌ＝クロード講演会関連企画〈ドキュメンタリービデオ上映会（17•20 日は解説付き上映有り）〉・〈ポスター展示〉
	20 日	第 3 回「軽度発達障害の世界を知る―思春期・青年期の生きにくさへの理解と援助に向けて―」
	24 日	クリスト＆ジャンヌ＝クロード講演会関連企画〈特別プレ・レクチャー〉「芸術とは何か？クリスト＆ジャンヌ＝クロードの魅力」
	30 日	クリスト＆ジャンヌ＝クロード講演会
11	7 日	〈映画上映と講演会〉「エドワード・サイード　OUT OF PLACE」
12	2 日	日吉「予算管理部門内調整費」による「新しい教養授業の支援」事業成果報告会
	16•17 日	Hiyoshi Research Portfolio 〈バリアフリー公開シンポジウム〉「軽度発達障害の理解と支援」 〈開かれゆくキャンパス〉「日吉キャンパスタウンミーティング」
1	12 日	第 4 回「軽度発達障害の世界を知る―思春期・青年期の生きにくさへの理解と援助に向けて―」
2	4 日	〈開かれゆくキャンパス〉慶應義塾一貫教育の冒険 2　福澤諭吉の手紙朗読会
	8 日	アカデミック・スキルズ「プレゼンテーション・コンペティション」
3	13 日	〈FD を考える 7〉教養教育とは何か―スタンフォード大学の取り組み ―
	14 日	センター運営委員会
	30 日	教養研究センター選書 4「アンクル・トムとメロドラマ」発行

終わりに

2006年度の活動を振り返って

教養研究センター事務長　吉川　智江

2006年度教養研究センターの活動は、基盤研究“慶應義塾大学の教育カリキュラム研究”のグループによるアンケート調査票の仕上げ作業に始まり、この1年も充実した研究・教育活動が展開された。

基盤研究では、2003・2004年度の研究成果「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点」を踏まえ、学部を超えてカリキュラムのあるべき姿を探る調査・研究が続いた。5月には、全学部から無作為抽出された5,000名の学生宛てにアンケート調査票が送付され、事務局はその回収作業を任された。塾生や教職員らの協力により得られたデータの分析作業のほか、成績評価の調査、カリキュラムの比較調査など、20名余の先生方が2年間、精力的に取り組んでこられた研究の成果は最終的に1冊の報告書にまとめられた。その第1章には、“実践可能な教育モデル”として28の提言が示されている。

もう一つの基盤研究“身体知研究”は秋学期、教職員、学生の参加による実験授業「体をひらく、こころをひらく」を開講、“身体”を巡る新たな知の構築を目指して研究が進められた。特定研究に位置付けられた「超表象デジタル研究」（文部科学省学術フロンティア推進事業）では、3つのユニットがワークショップや実験授業など実践的な研究を進展させた。

所員の研究活動を支援する側面では、一般研究として学部横断型のプロジェクト3件が採択され、センター選書1冊が刊行された。大学日吉所属の教職員を対象とする日吉管理部門内調整費による「新しい教養授業の支援事業」では、選考委員にセンター外の教員を加え、15件総額2,450万円の事業が採択された。

こうした一連の活動とともに、センターは教養教育研究を基盤とするさまざまな活動を塾内外に展開している。2006年度は、公開セミナー「ミシェル・フーコー使用法」のほか、米スタンフォード大学ハンス・Uグンブレヒト教授による教養教育に関する講演会が開催された。また、極東証券寄附講座「生命の教養学―生命を見る・観る・診る」では、通常の授業に加えて、JT生命史研究館から中村桂子館長を迎え、公開講演会、さらには出張ギャラリー展「見る・観る・診るの生命誌」を開催、夏休みの親子連れも散見された。HAPP（日吉行事企画委員会）および来往舎現代芸術展3「SWITCH」展では、参加型・協働型の企画が複数進行した。9月からは公開講座「自然と科学と人間」が開講され、ほぼ例年並の240名が受講した。

10月、京都造形芸術大学と共催した「クリスト&ジャンヌ＝クロード講演会」には600名を超える聴衆が集まった。ポスター展やビデオ上映会が同時開催され、プレ・レクチャーでは千住 博氏（日本画家・京都造形芸術大学副学長・塾員）が芸術と人生について熱く語られた。2月には、昨年度に引き続き、「一貫教育校の冒険2 ―福澤諭吉の手紙朗読会」が開催された。紺野美沙子氏（女優・国連開発計画親善大使・塾員）を進行役に学生、生徒、教員が共に舞台に立ち、福澤先生の心と思想に触れる朗読会となった。

一方、組織運営の側面でも幾つかの動きがあった。9月、任期満了に伴い、横山千晶所長が重任され、副所長として中島陽子文学部教授（新任）、萩原眞一理工学部教授（新任）、佐藤 望商学部助教授（重任）の3名が選出された。10月以降、2期目に入った横山所長の下では、教養研究センターの活動をより確たるものとするために組織体制や運営の見直しが進められた。

開所以来5年、教養研究センター運営委員会に準じ、センターの実質的な運営業務を担ってきたのがコーディネート・オフィスである。研究企画ボードと調査・研究、交流・連携、広報・発信の3つのセクションから構成され、研究企画ボードには、極東証券寄附講座、日吉キャンパス公開講座、日吉行事企画委員会の各運営委員が連なる。今回の見直しは、セクションを廃し、センターにおける諸活動を研究企画ボードの下にプロジェクト化し、それらをセンターの目的に立ち返り、研究、教育開発、交流の3つの機能に重層的に位置付け、より有機的に連携づけながら、活動を展開しようというものであり、1年をかけて規程改正へと繋げる予定である。

こうして来年度はプロジェクト型の運営体制へ移行する最初の1年となる。多様な分野の研究者が互いの研究教育活動への理解を深めながら、協働して教養教育としての知の世界を作り出そうとする教養研究センターの活動をより多くの方々にご理解いただき、今後もご教示、ご協力を賜りたい。

慶應義塾大学教養研究センター
2006年度 活動報告書

2007年7月31日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　横山千晶

〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL.045-563-1111（代表）
Email lib-arts@ml.hc.keio.ac.jp
http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/

編集・制作　慶應義塾大学出版会
印刷・製本　（株）太平印刷社

©2007 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。